2014 年 1 月 1 日

青森大学ニュース No.25

計画と点検評価により質の向上を進める

学長　崎谷康文

はじめに

平成２４年４月の学長就任時から、「青森大学ルネッサンス」を呼びかけ、大学の運営、教育研究、社会貢献など大学の活動全般にわたる改革を進めてきた。青森大学の再興と新生を目指し、「青森大学ルネッサンス」を推進していくため、最も重要なことは、青森大学を「地域とともに生きる大学」へ発展させることである。地域とともに生きる大学としての魅力を高めるには、教育機能の質的な向上が重要であり、本年度（平成２５年度）から、教養科目を再構築して導入した「青森大学基礎スタンダード」は、教職員すべての一致協力により、次第に成果を上げつつある。昨年９月に発足した「学習支援センター」の活動は、学生の主体的な学修の支援を始めている。青森大学は、「学生中心の大学」の構築に向けて、着実に改革を進めている。

「青森大学ルネッサンス」を的確に進め、地域とともに生きる大学へ、そして、学生中心の大学へと変革していくためには、目標や計画に照らし、具体的にどのような活動が実施できているか、総合的、体系的に整理しつつ点検し評価して、次の改善へつなげていく必要がある。

青森大学がこのような改革サイクルを確立していくことは、緊要な課題である。

大学の水準維持のための評価の重要性

大学は、学術の中心として、教育研究活動を行い、あわせて、生涯学習など社会貢献活動を行うことによって、社会の進展と文化の向上に資することを目的とする。大学の設立には、国の設置認可が必要であり、その際、適切な教育研究等の水準を維持できる教職員や施設等を有し、目的を達成できるかどうか、国が定める基準に照らし審査される。従前は、設置認可による規制が水準維持の手段としてほぼ唯一のものであったが、今は、そうではない。

平成３年に大学設置基準（文部科学省令）が改正され、大学が自己点検・評価をすることが努力義務となった。さらに、平成１１年に大学設置基準が改正され、自己点検・評価の実施と結果の公表が義務となった。その際、結果についての学外者による検証が努力義務化された。

平成１４年の学校教育法の改正により、すべての大学は、定期的に、文部科学大臣の認証を受けた認証評価機関による評価を受けることとする制度が導入され、平成１６年度から施行されている。認証評価制度の導入は、水準の維持のためには、事前の審査よりも事後の規制を強化することが適切であるとの考え方によるものである。

大学を対象とする評価には、第三者機関が行うものと大学自らが行うものとがある。法律上、外部の認証評価機関による評価と大学自らが行う点検評価のいずれもが義務づけられている。この両者は、密接に関連しており、第二期に入る認証評価においては、大学自らが自己点検・評価により質の向上の努力を行っているかどうかが審査の基本になるとされている。

認証評価は、認証評価機関が、対象となる大学の理念・目標に照らし、その教育研究、組織運営、施設設備、財務等の組織体としての総合的な状況について、７年以内ごとに評価するものであるが、その際、認証評価機関自らが大学評価の基準を定め、それに適合しているかどうかを審査する。

点検評価の前提としての目標と計画

どのような評価にも評価の基準が設定されている。大学は、学校教育法、学校教育法施行令、学校教育法施行規則、大学設置基準等が定める基準を満たさなければならず、外部からの評価に際しても、自己点検・評価に際しても、そのような設置基準は、重要な評価の基準となる。しかし、法的な基準は最低限の水準の維持のためのものであり、大学の自己点検・評価は、法的な基準を達成しているかどうかのみが基準となるものではない。

いかなる組織体においても、安定的、長期的に存続し、目的を達成していくためには、組織自らが将来の目標と計画を明確にして、実現のための手段や行程を具体的に定め、確実に実行していかなければならない。ましてや、大学は、学生を受け入れ、教育研究を継続的に進めることで、地域との交流や地域への貢献、人材の養成を行う機関として、自立性が求められている。将来の展望を持ち、目標や計画を定めて、常に改革、改善を図って、魅力を高め、教育研究等の活動を着実に実施し、地域の信頼と支援を得ていかなければならない。

青森大学のＰＤＣＡの改革サイクルの確立へ

青森大学は、目標と計画を確立し、その達成へ向けて具体的な活動を進め、成果や実施状況を点検評価して改善し、改革していくという、連続する活動をこれまで以上に強化しなければならない。

これまでも、１８歳人口の動向や地域社会の要望等を踏まえ、学部や学科、コースの構成や教育科目の内容などについて常に刷新を図り、地域からの信頼に応える努力をしてきた。これからは、さらに、ＰＤＣＡサイクル（計画―Ｐｌａｎ・実行―Ｄｏ・評価―Ｃｈｅｃｋ・改善―Ａｃｔｉｏｎの継続的な循環により不断の改革を進めること）を確立し、改革サイクルが一層有効に機能するよう、工夫し努力していく必要がある。

青森大学は、今、大学の将来像、学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針等を一層明確にし、全学的な教学マネジメントを確立しつつ、改革を推進している。

大学の将来計画については、地域とともに生きる大学として、学生中心の大学の構築へ向けて改革を続けていくという方向は明確である。そのような将来の展望の下に、昨年９月に、具体的に、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）及び入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）の大学全体の方針と各学部の方針を定めた。

青森大学のディプロマ・ポリシーは、次のとおりである。

「青森大学は、建学の精神及び基本理念に則り、２１世紀の社会の発展に貢献できる人間の育成を目指して、確かな教養と専門的な知識及び技術を身に付けさせるため、実践的な教育を行う。

本学の教育に当たっては、次の３つの力を備えた人材を育成する。

＜３つの力＞

・生涯をかけて学び続ける力

・人とつながる力

・自分自身を見据え、確かめる力

本学は、所定の期間在学し、基準となる単位数を修得することを学位授与の条件とする。」

ディプロマ・ポリシーに示された３つの力は、カリキュラム・ポリシーにおいても明示されている。

今後、これらの方針が適切に実施されるよう工夫改善を行い、点検評価して、必要な改革を進めていく必要がある。さらには、学修の成果に係る評価等の基準をアセスメント・ポリシーとして定めることが課題である。

ＰＤＣＡサイクルを機能させ、学部教育の質的転換を進めるためには、学長を中心とする全学的教学マネジメントの確立が必要である。学長が主宰し、学部長、各委員会の委員長等が参加する、本学の部長会は、全学的な教学マネジメントについての最も重要な意思決定機関である。部長会、各学部教授会、各種委員会等が相互の連携と分担を効果的に行って、改革のサイクルを推進していく必要がある。

平成２５年度から、教養科目を再構築し、基礎スタンダード科目群を設定し、教育内容と方法の改革を進めている。学生の能動的な学修を引き出すための教育方法の改革については、専門科目等へ及ぼしていくことが必要である。平成２６年度には、さらに、基礎スタンダードの改善、シラバスの改革、ＧＰＡ（Grade Point Average）の導入、ナンバリングの設定、ルーブリックの導入、地域貢献科目の導入などを行うこととしている。教職員一人ひとりがこれらの検討や実施の過程に参画し、自らの教育等の業務の点検、改善を行うとともに、大学全体の教育の質の向上のための改革を続けていかなければならない。

青森大学の将来計画

現在、青森大学将来計画委員会において、青森大学の将来計画について検討を進めている。青森大学の４学部の定員は、１０年前の２分の１となっている。青森県の高校卒業者数は、今後次第に減少していくが、青森県の進学率は全国平均よりかなり低く、県外への流出が多い。入学者増の可能性は十分にあると考える必要がある。県庁所在地に位置する青森大学が、地域とともに生きる大学として成果を上げるためには、文系、理系を有する総合大学としての強みを生かしながら、適正な規模を維持し、教育の充実を図り、志願者、入学者の拡大を図ることが急務である。そこで、薬学部は、青森県唯一の薬学部として現状の規模を前提として充実を図り、経営、社会、ソフトウェア情報の３学部については、それぞれの学部、コース等の特色を生かしつつ、統合等により再編成することを基本に、今後１０年程度を展望し、５年程度の将来計画を今年度中に作りたい。

将来計画には、学部等の組織の在り方を明確にするだけではなく、理念や目標、そして具体的な実施方策等を含めなければならない。大学の施設、設備等の更新充実のための計画、教員の研究の推進のための環境整備、科学研究費獲得の目標、教員の採用と研修等能力向上のための計画、青森山田高校をはじめ高校との連携事業の方針、オープンカレッジ等生涯学習・社会貢献の活動の方針などについて明確にし、さらに、大学の財務の状況の分析と見通しや大学と法人とが一体となって学園全体の管理運営の適切な推進を行うことを示すことが必要であると考える。

学園全体の将来計画との関連

青森大学は、学校法人青森山田学園が設置する大学であるから、学園全体の将来計画の中に青森大学が位置づけられる。青森大学の将来計画は、学校法人と連携を取りつつ、一体的な検討を踏まえて、青森大学自らが策定し実施するものであり、学園全体の計画との整合性が必要である。特に、学校法

人としての責任がある、学園の理事会等の管理運営と財務に関する将来計画との関係を明確にし、合理的なものにする必要がある。

現在、「学校法人青森山田学園経営改善計画平成２５年度～平成２９年度（５カ年)」（平成２５年７月５日）が策定されており、この経営改善計画には、「青森山田学園グランドデザイン（将来計画）―第一次基本構想―」（平成２５年９月２４日）が付加されている。グランドデザインは、大学からは、学長、学長補佐、社会学部長、ソフトウェア情報学部長等が参加した、学園全体のグランドデザイン委員会が審議し、まとめたものであるが、今後、具体的な実行計画等を作りつつ、必要な改訂を加えていくべきものである。グランドデザインは、青森山田学園全体の教育理念は「未来を拓くたくましさ」であるとし、３つの基本方針として、「地域に根ざした教育機会の再構築」「学力と実践力」及び「体験を重視した文化多様性の教育」を示している。これは、青森大学が、地域とともに生きる大学として、学生の主体的な学修を引き出し、未来を拓く実践力を身に付けさせる教育を進め、学生中心の大学をつくろうとしていることと合致している。

自己点検・評価報告書の作成について

青森大学は、平成１１年に最初の自己点検・評価報告書を作成し、平成１４年に第２回の自己点検・評価報告書を作成した。平成２２年に日本高等教育評価機構に提出した自己評価報告書も自己点検・評価の報告書と位置づけることができる。

平成２４年度、青森大学は、毎年度の大学の活動について、自己点検・評価報告書を作成するとの方針を決め、平成２４年度の報告書の作成を平成２２年度から設置されていた青森大学自己点検・評価委員会（学長が委員長）の下で作業を進めた。「平成２４年度青森大学自己・点検評価報告書」は、平成２５年９月に完成し、ホームページにおいて公表している。この自己点検・評価報告書は、関係する部局等の担当者が協力して作成したものであるが、なお精粗があり、また、十分に練られていないところがあることは否定できない。しかし、多くの教職員が熱意をもってとりまとめに参加して、大学の活動を振り返りつつ、将来の展望を考えながら、記録を確認し、記述することができたことは、評価されるべきことと考える。平成２５年度の自己点検・評価報告書の作成に当たっては、前年度の反省を踏まえ、より改良されたものにしたい。このような過程を続けていくことで、ＰＤＣＡサイクルの確立による大学の教育研究等の質の向上を進めていきたい。

次の機関別認証評価へ向けて

大学が質の向上を図るのは、文部科学省や私学振興・共済事業団から補助金を得たり、認証評価の審査を突破したりできるようにするためであると考え、そこで思考を止めることは間違っている。監督、支援や評価を受けることは、現在の大学にとって制度的にも必要なことであるが、そのためにのみ大学が行動するのではない。そのような仕組みがなくとも、大学は、自立した機関として、学問研究を行い、学生の教育や地域社会への貢献活動を進めなければならない。関係機関の動向についてできる限り配慮するとしても、あくまで、大学の使命を的確に果たすため、積極的に行動する必要がある。

それでも、第二期の認証評価が控えている。対策が必要である。公益財団法人高等教育評価機構は、平成２６年度版の「大学機関別認証評価大綱」において、平成１６年度からの認証評価の最初の７年のサイクルが終わり、二期目に入った認証評価の目的について、次のように述べている。

「評価機構が、大学からの要請に応じて行う評価は、我が国の大学の発展に寄与するために、以下のことを目的として評価を行います。

(1) 各大学が行う自己点検・評価の結果分析を踏まえ、評価機構が定める評価基準に基づき、教育研究活動等の総合的な状況を評価するとともに、自己点検・評価の検証を行い、各大学の自主的な質保証の充実を支援すること。

(2) 各大学が教育研究活動等の総合的な状況を適切に社会に示すことにより、広く社会の支持を得ることができるように支援すること。

(3) 各大学の個性・特色に配慮した評価を行うことにより、各大学の個性・特色ある教育研究活動等の自律的な展開を支援・促進すること。」

この大綱において、第二期の認証評価が第一期と異なる点が次のように説明されている。

「一つ目は、認証評価受審時の自己点検・評価であっても、単に認証評価のためのものではなく、自主的な質保証のための本来的な自己点検・評価の一環として明確に位置付けたことです。二つ目は、評価機構が設定する「評価基準」は基本的・共通的な事項に限定し、大学はこれに自らの使命・目的に即した自己点検・評価項目を加えるようにしたことです。このような改訂によって、認証評価の効率性を高めることとともに、大学の個性・特色をより重視した評価にすることができると考えています。

・・・・評価の方法としては、大学が行う自己点検・評価の結果を分析して行います。言い換えれば、大学が自ら行う自己点検・評価の結果を踏まえ、それを土台にして評価するのであり、これには大学の自主性・主体性を尊重した評価方法としての意味があるといえます。質保証の主体は大学であり、その基本は大学の自己点検・評価にあります。・・・・認証評価の目的は、大学の教育研究活動等の総合的な状況を評価することですが、その重要なねらいは、大学の自己点検・評価の実施状況を検証することによって、大学の自主的な質保証機能を高めることにあると考えます。」

このように丁寧に説明されていることで分かるように、大学自らが自己点検・評価の活動を効果的に実施しているか、ＰＤＣＡの改革サイクルが有効に機能しているかどうかが審査の中心となると考えるべきであろう。

高等教育評価機構が示している評価基準は、上記の考え方に基づき、基準項目（１－使命、目的等　２－学修と教授　３－経営・管理と財務　４－自己点検・評価の４項目。小項目では２２項目）について、評価の視点、エビデンスの例示（評価の根拠となる事実）を示している。

以上のような状況を十分に考慮しつつ、計画と点検評価に基づく改革を前進させ続けていく必要がある。

参考

「青森大学ルネッサンスを進めよう」から抜粋（青森大学・短期大学ニュースＮｏ．２２　平成２４年７月１日）

具体的な進め方

青森大学ルネッサンスを具体的に進めるには、次の３点について考えることが必要である。

①　進めるべき活動を体系化し、全体の形が見えるようにする

教育、研究、社会貢献などの様々な活動がばらばらに考えられていては、無駄が生じ、また、漏れが出る。項目別に整理し、関連性を示すなど、大学としての活動を体系化し、全体の姿が見えるようにしなければならない。

② **すべての活動について、進行管理を的確に行う**

物事を進めるには、早期に準備をし、順次段階的に計画を実施していくことが必要である。その場合、あらゆる段階において、中途の検証と分析が不可欠である。それにより、常に改善を図りつつ着実に進めていくことができる。

③ **最後の詰めー目標達成ーまで全力を尽くし確認する**

目標を定め、動き出した活動は、最後の詰めまでしっかりと確認することが大切である。ともすれば、終わり近くで気がゆるみがちになるが、詰めを怠ってはならない。最後まで全力を尽くしてこそ、次の活動へ進むことができる。スローガンの言いっぱなしは許されない。

学長の活動（平成２５年７月～１２月）

[随筆・評論等]

青森大学ホームページの学長ブログ

随想「大空を見上げて」

第１６回「日本語について」　第１７回「平面から立体へ」　第１８回「日本中央」

第１９回「今年の大学祭」　第２０回「寺山修司の生き方」

第２１回「１１匹のねこと好奇心」

評論「学びの温故知新」

第１５回「規範意識の涵養」　第１６回「生徒指導における二つの視点」

第１７回「懲戒と体罰禁止」　第１８回「不登校の問題」

第１９回「教育における個性重視」　第２０回「教えることの大切さ」

「教育プロ」（株式会社 ERP 発行）掲載の「時評」

「第二期教育振興基本計画」（平成 25 年 7 月 2 日号）

「大学格差をどう解消するか」（平成 25 年 9 月 3 日号）

「オリンピック開催へ向けて」（平成 25 年 11 月 5 日号）

「上方芸能」第１８９号（平成 25 年 9 月）（「上方芸能」編集部発行）の「エッセー好きなせりふ」

「現在母御を手にかけて」

[講師等]

青森大学オープンカレッジ市民大学（講演「生涯学習のすすめ」11 月 29 日）

[社会的活動等]

姫路城大天守保存修理検討会（姫路市）副会長（検討会 7 月 29 日）

姫路城大天守保存修理検討会姫路城内展示及びサイン更新業務業者評価会（姫路市）座長（評価会 10 月 7 日）

公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構理事（理事会 10 月 29 日）

公益財団法人文化財建造物保存技術協会理事（理事会 11 月 20 日）

日本イコモス国内委員会監事（理事会 12 月 7 日）

公益財団法人がん研究会評議員（評議員会 12 月 11 日）

縄文遺跡群世界遺産登録推進本部参与として視察

9 月 11 日　二ッ森貝塚（七戸町）、長七谷地貝塚（八戸市）、是川石器時代遺跡（八戸市）

9 月 24 日　大森勝山貝塚（弘前市）、亀ヶ岡石器時代遺跡（つがる市）、田小屋野貝塚（つがる市）、大平山元遺跡（外ヶ浜町）

10 月 3 日　キウス周堤墓群（北海道千歳町）

10 月 10 日　御所野遺跡（岩手県一戸町）、三内丸山遺跡（青森市）、小牧野遺跡（青森市）

10 月 16 日　垣ノ島遺跡（北海道函館市）、大船遺跡（北海道函館市）

10 月 17 日　鷲ノ木遺跡（北海道森町）、入江・高砂貝塚（北海道洞爺湖町）、北黄金貝塚（北海道伊達市）

11 月 11 日　伊勢堂岱遺跡（秋田県北秋田市）、大湯環状列石（秋田県鹿角市）

全学の動向

外部資金の獲得状況

科研費獲得状況（平成 25(2013)年度）

研究者	研究テーマ	補助金額	助成区分
（研究代表者） 経営学科 石塚 ゆかり　准教授	日韓の苦情とクレームに関する社会言語学研究－ビジネス現場と医療機関を中心に－ （前年度からの継続研究）	1,040 千円	若手研究(Ｂ)
（研究代表者） 社会学科 澁谷 泰秀　教授	高齢者の社会情動的選択性とリスク志向性が及ぼす生活の質への影響 （前年度からの継続研究）	650 千円	基盤研究(Ｃ)
（研究代表者） 社会学科 柏谷　至　教授 （研究分担者） 社会学科 澁谷 泰秀　教授 中村 和生　准教授 佐々木 てる　准教授	環境配慮行動における文化的フレームと意思決定モデルとの統合的アプローチ （前年度からの継続研究）	2,080 千円	基盤研究(Ｃ)
（研究代表者） 薬学科 中田 和一　教授	反射波遮蔽フェンスによるローカライザの積雪障害の抑制に関する研究	1,300 千円	基盤研究(Ｃ)
（研究分担者） 社会学科 澁谷 泰秀　教授	郵送・インターネットによる実験的な職歴調査の実施 （前年度からの継続研究）	256 千円	奈良大学 （吉村 治正） 基盤研究(Ｃ)
（研究分担者） 社会学科 澁谷 泰秀　教授	社会情動的選択性から見た高齢者のソーシャルネットワークに関する研究 （前年度からの継続研究）	767 千円	秋田大学 （渡部　諭） 基盤研究(Ｃ)

（研究分担者） 社会学科 柏谷　　至　教授 櫛引 素夫　准教授 佐々木 てる　准教授 社会福祉学科 田中 志子　准教授 ソフトウェア情報学科 小久保　　温　准教授 坂井 雄介　准教授	電子エコマネーを活用したボランティア・コーディネート支援ツールの開発 （平成 28 年 3 月 31 日まで）	1,530 千円	八戸大学 （石橋　修） 基盤研究(C)
計	7 件	7,623 千円	

その他の研究助成金（平成 25(2013)年度）

研究者	研究テーマ	助成金額	交付機関等
（研究代表者） 薬学科 上田 條二　教授	地域薬局の役割に関する研究	1,000 千円	㈱医薬品情報センター
（研究代表者） 薬学科 齋藤 俊昭　准教授	第 1 類医薬品の販売状況と適正使用に関する研究	1,000 千円	㈱医薬品情報センター
（研究代表者） ソフトウェア情報学科 小久保　温　准教授	インターネット社会調査と多様化する情報端末―スマートフォン、タブレット端末時代の社会調査に向けて	600 千円	財団法人 電気通信普及財団
（研究代表者） 社会福祉学科 船木 昭夫　教授	平成 25 年度自殺防止対策取り組み検証事業 （青森県自殺対策検証研究会）	4,446 千円	青森県
(研究代表者) 社会学科 菅　勝彦　教授 (研究分担者) 柏谷　至　教授 社会福祉学科 田中 志子　准教授	郊外型住宅団地における地域課題とコミュニティ再生に関する調査研究 (H.25年度)	402千円	青森学術文化振興財団
計	4 件	7,046 千円	

出張講義などの実施状況

平成 25 年度の出張講義は、平成 25 年 12 月 19 日現在で派遣教員は 20 名、全体の講義開講は 42 回となっている（依頼機関 は 22 機関）。

No	依　　頼　　先	講義日	氏　名	学　科	講義テーマ
1	青森県警察本部厚生課	4 月 22 日	藤林　正雄	社会福祉学科	傾聴を学ぶ
2	青森県生活協同組合連合会	4 月 25 日	佐藤　栄作	薬学科	高齢者とクスリについて
3	ライトサークル	4 月 20 日	徳光　幸子	薬学科	生活習慣病の予防と治療

4	オープンカレッジ市民大学	5 月 17 日	柏谷　至	社会学科	自然エネルギーの先進地・青森をめざして
5	オープンカレッジ市民大学	6 月 28 日	清川　繁人	薬学科	植物ポリフェノール
6	青森県立三本木高等学校	7 月 3 日	熊崎　隆	薬学科	薬学部の概要・薬学系の研究について
7	後援会　西日本支部	7 月 14 日	崎谷　康文	学長	青森大学を新しくする
8	青森県自動車会議所	7 月 19 日	岩淵　護	経営学科	自動車市場のエレクトロニクス化と情報化
9	三戸地方教育研究所	7 月 25 日	船木　昭夫	社会福祉学科	ソーシャルスキル
10	オープンカレッジ市民大学	7 月 26 日	武蔵　恵美子	社会福祉学科	認知症のはなし
11	オープンカレッジ市民大学	8 月 30 日	坂井　雄介	ソフトウェア学科	コンピューターのしくみ
12	秋田市立御所野学院高等学校	9 月 4 日	上田　條二	薬学科	未成年の飲酒喫煙について
13	オープンカレッジ市民大学	9 月 13 日	佐々木　てる	社会学科	日常的差別を読み解く
14	函館少年刑務所	9 月 13 日	船木　昭夫	社会福祉学科	問題解決場面への対応
15	青森県立むつ工業高等学校	9 月 18 日	徳光　幸子	薬学科	麻薬・覚醒薬乱用の危険
16	オープンカレッジ市民大学	9 月 20 日	藤林　正雄	社会福祉学科	精神障害とは何か
17	青森高齢・障害者雇用支援センター	9 月 27 日	船木　昭夫	社会福祉学科	ストレスとコミュニケーション
18	オープンカレッジ市民大学	9 月 27 日	白岩　貢	ソフトウェア学科	叙情歌を楽しむ
19	オープンカレッジ市民大学	10 月 4 日	石塚　ゆかり	経営学科	傾聴のすすめ−円滑なコミュニケーションのために
20	青森市男女共同参画プラザ　カダール	10 月 16 日	藤林　正雄	社会福祉学科	傾聴（初心者対象）
21	青森市男女共同参画プラザ　カダール	10 月 18 日	藤林　正雄	社会福祉学科	傾聴（初心者対象）
22	オープンカレッジ市民大学	10 月 18 日	久慈　きみ代	社会学科	高照神社の源氏物語
23	黒石市まちづくり推進係	10 月 19 日	石塚　ゆかり	経営学科	『磨こう！コミュニケーションスキル−心を開く「聴き方」と「伝え方」−』
24	黒石市まちづくり推進係	10 月 26 日	石塚　ゆかり	経営学科	『発揮しよう！リーダーシップ−信頼を築く「チームビルディング」−』
25	青森簡易裁判所	10 月 28 日	船木　昭夫	社会福祉学科	ストレスとコミュニケーション
26	青森高齢・障害者雇用支援センター	11 月 7 日	船木　昭夫	社会福祉学科	ストレスとコミュニケーション
27	青森高齢・障害者雇用支援センター	11 月 7 日	船木　昭夫	社会福祉学科	明るい職場・家庭とメンタルヘルス
28	青森市戸山市民センター	11 月 13 日	藤林　正雄	社会福祉学科	趣味を持つこと　ストレス対処法
29	中央市民センター	11 月 20 日	佐藤　栄作	薬学科	薬はなぜ効くか？
30	オープンカレッジ市民大学	11 月 22 日	沼田　郷	経営学科	カメラ産業とデジタルカメラ
31	中央市民センター	11 月 26 日	雨森　輝昌	社会福祉学科	中高年の体力・健康づくり運動の実際
32	オープンカレッジ市民大学	11 月 29 日	崎谷　康文	学長	生涯学習のすすめ
33	黒石市六郷公民館	12 月 7 日	大平　幸子	事務局長	地産りんごの活用レシピ
34	中央市民センター	12 月 11 日	上田　條二	薬学科	身近な民間薬
35	五所川原市地域包括支援センター	12 月 11 日	藤林　正雄	社会福祉学科	人間関係で悩まないために
36	青森歯科医師会	12 月 19 日	藤林　正雄	社会福祉学科	傾聴を学ぶ

37	黒石市六郷公民館	1 月 11 日	大平　幸子	事務局長	体健やかヘルシーレシピ
38	県立黒石高等学校	1 月 14 日	佐藤　栄作	薬学科	薬の開発と病気について
39	中央市民センター	1 月 24 日	佐藤　栄作	薬学科	薬はなぜ効くか？
40	中央市民センター	1 月 28 日	藤林　正雄	社会福祉学科	人間関係で悩まないために
41	黒石市六郷公民館	2 月 15 日	大平　幸子	事務局長	体温まるぽかぽかレシピ
42	五戸町教育委員会	2 月 21 日	安藤　清美	社会福祉学科	遺言

平成 25 年 12 月 19 日現在（37～42 は予定）

依頼機関 22 機関　派遣教員 20 名　講義開講延べ数 42 回

大学の行事（平成 25 年 7 月～12 月）

・8 月 3-7 日　ねぶた出陣
・9 月 14 日　夏季教職員研修会
・9 月 27 日　秋卒業式
・10 月 1-2 日　認証評価再審査実地調査
・10 月 12-13 日　大学祭
・10 月 12 日　青森大学図書館文化講演会
・12 月 6-7 日　青森大学企業セミナー
・12 月 21 日　冬季教職員研修会

[平成 26 年度から始まる教育の質保証の取組み]

教務部長
鈴木康弘

教育改革の現状と今後の活動

「青森大学ルネッサンス」がめざしている教育改革とは、「地域とともに生きる大学」と「学生中心の大学」という２つの大学像を実現できるカリキュラムや教育体制を創造することであり、各教員が学生の成長を確実に押し上げることができるように教育力を高めることである。昨年９月、本学は学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）及び入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）が定め、特に、ディプロマ・ポリシーでは、本学が入学した学生にどのような知識と技術、人間力を保証するのかを学内外に明示した。

これらの三つのポリシーの公表を受けて、平成 26 年度には、1) 「青森大学基礎スタンダード」の内容や方法の改善、2) 地域貢献活動を含む「創成コア」の新設、3) GPA 制度の導入、4) 科目ナンバリングの実施、5) 三つのポリシーに沿ったシラバスの改革を行う。これらの諸改革は地域における本学の存在意義を高める重要な取組みであり、その成功のために教職員は主体的な活動と幅広い協働が求められている。

基礎スタンダードの内容や方法改善

今年度から導入された基礎スタンダードは、「青森大学ルネッサンス」の方針に沿って教育機能の質的な向上を実現し、地域とともに生きる魅力ある大学に転換する取組みの一つである。これまで基礎スタンダードの各授業において、さまざまな学問分野の教職員が協力し、学生のアクティブラーニングを推し進めようと努力してきた。確かに、授業テーマやグループワークの方法に改善を求める声も少なくないが、その一方で、コミュニケーション力や自己表現力のある元気な学生が育ってきているという成果も数多く報告されている。

昨年の９月９日、秋田大学で開催された「東北地域大学教育推進連絡会議」に、青森大学は、東北大学、秋田大学とともに話題提供者（鈴木康弘、坂井雄介）として招かれ、大学のユニバーサル化に対応できる新しい教養教育として「基礎スタンダード」を始めたことが評価された。そして主体的な学びを促すアクティブラーニングが大学教育でさらに研究・実践されなければならないことを参加者と共有することができた。

今後、基礎スタンダードの教育機能を高めるために、より多くの教職員が協力して本学独自の授業を設計し、効果的なアクティブラーニングを実践できるかどうかが一つの課題である。

地域貢献活動を含む「創成コア」の新設

青森大学は「地域とともに生きる大学」に成長することを基本理念に謳っているが、それを本格的に実践し始めたのは青森大学ルネッサンスの方針として明記された平成24年度からである。平成24年度に地域貢献センターが設立され、教員が地域貢献の活動に奔走し始めたが、それだけでは、本学が「地域とともに生きる大学」であると自認することはむずかしい。地域貢献の活動を体系的に整えることが必要であり、特に、授業として地域貢献科目又は地域と関わる科目を正規のカリキュラムに配置していなければならない。

平成26年度から、基礎スタンダードに「創成コア」を加え、教養コアと技能コアと合わせて三つのコアからなるカリキュラム構造とする。「創成コア」では、学生がキャリア形成をして社会に出て、社会人として自律していける力を育てること、そして、地域の人々と交流をして、そこで直面した具体的、現実的な課題にぶつかりながら新たな挑戦をして成長していくことを期待している。

「創成コア」で開講される科目（予定）

演習(必修)	基礎演習(1年前期)	新規	基礎スタンダード全体の基礎 全学共通、共通テキスト使用
	地域貢献基礎演習(1年後期)	新規	
	地域貢献演習(2年前後期)	新規	
演習(選択)	地域貢献プランニング(3年以降)	新規	
学生主導活動を含む科目	インターンシップ(1～4年)	既存	
	ボランティア(1～4年)	改善	認定活動を拡大する。
就職力育成科目	キャリアデザインⅠ・Ⅱ(1～2年) ※薬1～4年	改善	
	就職活動実践演習(3年) ※薬は5年	改善	
「地域」を含む科目	該当する専門科目	改善	各学部・各教員が決める。

GPA 制度の導入

次年度から GPA 制度を導入することが決定し、教務委員会と FD 委員会とが連携して、本学の実情に適した GPA 制度を研究し、次の図のような基本ルールを確認した。また、この制度に対応する IT 化支援システムの改修方法も承認されて改修に入っている。

現在、大学全体及び各学部では、GPA 制度を活用した学生の主体的な学修を支援するしくみや、GPA から除外する科目の検討を進めている。なお、平成 25 年度以前の入学生には GPA 制度は適用されない。

GPA 評価規準

点数	評価	合否
100～90	AA	合格
89～80	A	
79～70	B	
69～60	C	
59～0	D	不合格
評価不能	N	

※N(No Grade　評価不能)は、授業時数の 3 分の 1 を超えて欠席した場合又は定期試験を受けなかった場合の評価とする。

科目ナンバリングの実施

科目ナンバリング制度を平成 26 年度から導入する。これは、文部科学省が平成 24 年 6 月 5 日に提唱した「大学改革実行プラン～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～」や、中央教育審議会が平成 24 年 8 月 28 日に公表した答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～」への対応の一環でもあり、青森大学が、全国の私学に遅れることなく、むしろ先んじて教育改革を進めているというメッセージを発信するためには必須の改革である。

教育力の向上の面でも、青森大学が科目ナンバリングを導入する意義は大きい。a）この制度を導入することにより、全学部がディプロマ・ポリシーの実現に向けて、カリキュラム編成の考え方を共有できる。b)教職員が相互に、カリキュラムの系統性を確認しながら、科学的にカリキュラムを編成・改善することができる。特に、科目の重複や欠落の点検ができ、科目の削減・補充などが容易になる。c)授業の難易度や位置づけがわかるようになり、学生が難易度に応じて授業を選びやすくなる。

科目ナンバリングは、ディプロマ・ポリシーを達成するためにカリキュラムを無駄なく不足なく体系化するための「見える化」ツールである。現在、教務委員会と教務課が協働して、基礎スタンダードカリキュラム、学部専門カリキュラムの両方でカリキュラムマップの作成に着手している。

三つのポリシーに沿ったシラバスの改革

昨年 9 月に青森大学の三つのポリシーが公表され、これにしたがってカリキュラムと授業を見直す共通のしくみが構築された。特に、ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーには、「3 つの力」（ディプロマ・ポリシーを参照）の育成が掲げられていて、平成 26 年度のシラバスでは、3 つの力の

育成に各科目がどう取り組むかを示さなければならない。そのために、シラバス様式の変更、シラバス作成要項の改訂を行っている。また、ＩＴ化支援システムの改修が完了するのを待っているところである。

a)「3 つの力」に関する達成目標を示す欄を設ける

学生の達成すべき行動を評価する 12 の観点を設定し、その達成水準を 3 段階としたルーブリックを作成し、教育成果の「見える化」に着手した。各教員は 3 つの力の 12 の観点のうち授業をとおして学生に身につけて欲しい能力をいくつか選び、到達してほしい水準を目標として示すことになる。ただし、このルーブリックは本学の教育成果を客観視するためのツールの一つであり、授業方法の研究・改善に応じて改訂を繰り返すべきものである。

b)地域貢献科目として大学が認定していることを示す欄を設ける

大学の基本理念に掲げられている「地域とともに生きる大学」の考え方に沿って、地域貢献活動を取り入れたり地域と関わったりする授業をシラバスで確認できるようにする。学生はこの欄を見て、授業で獲得できる知識や能力を概ねつかむことができ、本学の教育に関心のある学外の人々は、「地域とともに生きる大学」としての教育力を判断することができる。

平成 26 年度シラバスでは、新たにつけ加えられたこの 2 点だけが重要なのではない。むしろこの 2 点を含む授業全体の目標設定、内容、方法が、学生の主体的な学びを促すように工夫されているかがより重要である。次年度のシラバスの作成に当たっては、教職員すべてが、「学生中心の大学」を標榜する青森大学の授業とはどうあるべきか、議論を重ねながら、よりよいシラバスにしていく努力が必要である。

[就職委員会の活動]　（李 孝烈）

就職委員会では学生の就職率 90％以上の達成を目標として、1 年から 4 年（薬学部は 6 年）までの学生の就職活動支援をゼミ担当教員と連携して実施している。5 月にＳＰＩ模擬試験及び一般常識テストを行った。

引き続いて、5 月末から 12 月まで、3 年生向けの就職ガイダンスを全 15 回の日程で開催した。これらの内容は系統的に関連付けられているので、順番に内容を身につけていけば、3 年生 12 月 1 日のエントリー・オープンに自然と繋がっていくように計画されている。今年度新しく採り入れた内容は 2 件ある。一つは、グループディスカッション（ＧＤ）対策（9 月 26 日実施）であり、もう 1 件はグループ別内定報告会（11 月 14 日実施）である。ＧＤはここ数年で採用試験に導入する企業が急速に増加している。企業側では、学生の協調性や指導力を比較するため実施していると考えられる。ガイダンスでは、リクルート・キャリアの方を講師として、8 人のグループ編成で「会社選びにおいて重要なことは何か？」というテーマでディスカッションを実施した。ほとんどの学生は慣れないディスカッションにとまどっている様子であったが、実はこのＧＤを自分のものとすれば他の学生との差別化が図れ、採用試験において大きなチャンスとなることを学生には理解していただきたい。新しい内容のもう一件は、グループ毎の内定報告会である。昨年、経営学部・社会学部合同での実施に対して 3 年生から好評の声が多く、今年度はソフトウェア情報学部を含めて、全学的に実施した。事前に内定者の業種、企業名リストから 3 年生の希望を募った。3 学部 4 学科から、様々な業種、企業に内定した 11 名の 4 年生に参加していただき、1 グループ 10 数名の 3 年生が内定者から、内定に至るまでの苦心談を聞き、具体的な事柄を熱心に質問していた。4 年生に対しては、履歴書の添削や、個別面談での具体

的なアドバイスなどを実施している。また、東北地区私大企業セミナーが 6 月 13 日（木）に仙台で実施され、学生の費用負担の軽減を図るため本学から無料の送迎バスを準備した。

本学では、企業セミナーを 4 月と 12 月の 2 回実施している。4 月のセミナーは 26 日（木）、27 日（金）の 2 日間実施し、計 40 社の企業参加があった。主な対象学生は 4 年生である。12 月の企業セミナーは就職委員会にとって最大の行事であり、今年度は 12 月 6 日（金）、7 日（土）の 2 日間にわたり、延べで 199 社の企業と 677 名の学生が参加した。昨年度と比較して 46 社の増加となり、景気の上向き傾向が実感される。崎谷学長からの企業に対する歓迎の挨拶終了後に、多くの学生が目指す企業のブースへと足早に移動していた。主な対象学生は 3 年生であるが、4 年生の未内定者も継続採用の企業のブースに足を運んでいた。また、今年度から開始された必修科目である「キャリアデザイン」を受講する 1 年生全員と 、2 年生の多くの学生も参加していた。参加企業の方から、 1 、2 年生参加について概ね好評のご意見をいただいた。

青森大学は、東北 6 県の私立大学 28 校から構成される「東北地区私立大学就職問題協議会」に加盟している。今年度青森大学が総会開催の当番校となった。6 月 6 日（木）～7 日（金）の期間、ホテル青森において総会を行い、引き続いて「就職指導の充実」を図るための分科会を実施した。

現在の 2 年生から、就職広報活動の解禁時期が変更となり、3 年生の 3 月 1 日から、また採用選考活動の開始が 8 月 1 日からとなった。そのため 12 月の企業セミナー実施時期の見直しと、就職ガイダンスの実施時期等についての対応が今後の大きな課題である。

[青森商工会議所と青森地域 5 大学との連携協定締結]

7 月 2 日、青森商工会議所と地域 5 大学（青森大学、弘前大学、青森県立保健大学、青森公立大学、青森中央学院大学）は、相互の密接な連携と協力により、大学の「知」を活かし、地域の課題に迅速かつ適切に対応し、活力ある個性豊かな地域社会の形成と発展に寄与することを目的とする協定を締結しました。

協定締結を機に、商工会議所と 5 大学が一層の連携を図り、地域産業の振興や中心市街地活性化等の地域活性化、健康福祉の増進、人材育成などの諸課題に積極的に取り組んで参ります。

青森大学は、地域とともに生きる大学として、経営、社会、ソフトウェア情報、薬の 4 学部の持つ知的資産を生かして、商工会議所にかかわるあらゆる産業分野との連携を進め、青森の活性化に貢献していきます。

（大学ホームページより）

[教職員対象の救命講習会の実施]

救命時において基本的心肺蘇生法を実施し、AED(自動体外式除細動器)を正しく安全に使用できるよう、昨年度に引き続き「救命講習会(普通救命講習I)」を実施(7月2日、8日、10日)した。参加者は、 3日間合計で29名の教職員が受講した。

（7月部長会資料より）

[交通安全講習会の実施]

6月末段階で、昨年を上回る車両事故(5 件)が発生していることから、急遽、JAFに講習会を依頼し実施した(7月17日)が、自主参加制のため出席学生数は 28 名に留まった。今後、登校に車両を使用し、駐車場を利用する学生に対して、駐車場利用許可制度を適用し、講習会の受講を義務付けるなど、交通安全意識向上に向けた対応が必要である。

（7月部長会資料より）

[三宅一生氏企画特別公演「青森大学男子新体操部」の開催]

本学新体操部を世界的なファッションデザイナーの三宅一生氏が企画した特別公演「青森大学男子新体操部」が７月１８日、国立代々木競技場第二体育館で行われました。選手たちの躍動感あふれる演技と衣装・音楽・照明技術を組み合わせて繊細かつダイナミックに幻想的な世界が表現され、約 3 千人の観衆を魅了しました。

そして、この公演のドキュメンタリー映画「ＦＬＹＩＮＧ　ＢＯＤＩＥＳ」が完成しました。監督は映画「ＴＡＪＯＭＡＲＵ」の監督の中野裕之氏です。この作品は公演の準備段階から本番当日までの 3 ヶ月にわたる青森大学新体操部の挑戦の日々を捉えた感動的な作品となっています。たった一度だけの特別な公演に向けて、選手たち、そしてコーチ陣が、何を考え、何を感じ、何に悩みながら日々練習に取り組んで来たか、プロジェクトの舞台裏が中野監督の目を通して描かれています。青森においては平成 26 年 1 月 25 日～2 月 28 日まで青森松竹アムゼにて上映されます。

（大学ホームページより）

[青森大学教職員研修会（心の健康について）の開催]

7 月 23 日(火) 15:00～16:30 図書館新館 3 階視聴覚室に於いて「心の健康について」をテーマに職員研修会を実施しました。講師は弘前大学保健管理センター准教授・臨床心理士の田名場美雪氏でした。

研修内容は「学生の生活サイクルに」「メンタルヘルス上の問題」「うつ」「自分自身はどうか」で、大変参考になりました。

[青森大学教職員研修会（大学におけるハラスメントについて）の開催]

7 月 26 日(金) 15:00～16:30 図書館新館 3 階視聴覚室に於いて「大学（職場）におけるハラスメントについて」をテーマに職員研修会を実施しました。講師は沼田徹法律事務所所長・弁護士の沼田徹氏でした。

研修内容は「セクシャルハラスメントについて」「パワハラについて」で、それぞれのハラスメントの定義から対策方法、実例を挙げていただいて大変参考になりました。

[新体操部が全日本学生新体操選手権大会 12 連覇]

8 月 24 日から 27 日まで北九州市立総合体育館で行われた第 65 回全日本学生新体操選手権大会で本学新体操部が男子団体で優勝し、見事 12 連覇を達成しました！！ また、男子個人総合では小林翔君(経営 4 年:青森山田高校出身)が準優勝、川西雅人君(経営 4 年:坂出工業高校出身）が 6 位に入賞しました！！

（大学ホームページより）

[平成 25 年度夏季教職員研修会]

9 月 14 日（土）に夏季教職員研修会を行いました。

日本私立学校振興・共済事業団　私学経営情報センター　私学情報室　室長の菊池裕明氏を講師に招き、『学士課程教育の充実に対する私学助成と経営基盤の強化』という演題で基調講演をいただきました。

平成 25 年度のテーマは、『学生中心の大学』をつくるための教育改革。まず、盛田稔理事長からは、「学生が先生へどんどん質問し、先生を困らせるくらい質問する大学になってほしい」と挨拶。

次いで、崎谷康文学長は、『学生中心の大学をつくるための教育内容･方法の抜本的改革』をテーマに、「時代を先取りし、学生の能動的な学修を引き出し、大学の魅力を高めていくこと」などを提言しました。

引き続き冒頭に記載した、菊池裕明氏の基調講演。質疑応答のあと、休憩をはさみ、①青森大学基礎スタンダードの実施状況②今後の教育改革の取組みの方向について各先生方から報告があり、閉会となりました。青森大学は、現在、すべての学生が未来を拓く実践力を身に付けていけるよう、教育課程の質の向上のための改革を全学で取り組んでおり、教職員の一致協力により一層の改善工夫を進めていくことを改めて確認しました。

（大学ホームページより）

[平成２５年度秋季学位記授与式]

平成２５年９月２７日、平成２５年度秋季学位記授与式が行われました。

はじめにソフトウェア情報学部１名、薬学部卒業生１４名の名前が読み上げられ、崎谷学長より学位記が授与されました。

学長式辞では「青森大学で学んだことは、確実にみなさんの人生を支えていく力になります。時々は青森大学での学生生活を思い起してください。卒業おめでとう。皆さんの輝ける未来をお祝いします」との言葉が送られました。

その後、青森山田学園理事長盛田稔先生より「いつまでも疑問を持ち、研究心を忘れないで頑張ってほしい」とのご祝辞をいただきました。

最後に出席者全員で校歌「若者よ　若者よ」を斉唱し、式を締めくくりました。

卒業生の皆さん、おめでとうございます。これからのご活躍を心より祈念いたします。

（大学ホームページより）

[学生相談室の開設]

あおもり若者サポートステーションでは、学校を卒業・中退後、あるいは仕事を辞めた後、長期に職業に就けず悩む若者を主な対象に、スタッフである精神福祉士や臨床心理士らがカウンセリング支援を行っている。今回、本学の 7 号館学生相談室を出張場所とする、「出張カウンセリング」を実施して頂く事になり、対人関係や就労不安を抱える本学学生をはじめ一般市民の相談に対応する予定となっている。10 月 29 日(火)から、全 6 回(13:00~17:00)実施される予定である。

実施日　10/29,11/26,12/17,1/28,2/18,3/4

（9月部長会資料より）

[認証評価再審査実地調査の実施]

10月1日(火)～2日(水)(1 日は学内視察のみ)に実施された。1月下旬に再評価報告書が評価機構から届く。これに対する異議申し立ての期間を挟んで、2月中旬に最終的な評価が確定される。

（10月部長会議事録より）

[大学祭図書館文化講演会]

10 月 12 日(土) 13:00～14:30 図書館新館 3 階視聴覚室において、大学祭のイベントとして、環境省東北地方環境事務所所長の徳丸久衛氏を講師に「グリーン復興プロジェクト～三陸復興国立公園＆みちのく潮風トレイル～」をテーマに講演していただきました。入場者は 54 名でした。

（大学ホームページ・10 月部長会資料より）

[第 20 回青森県高等教育機関懇談会及び第 14 回青森県学校教育関係者合同懇談会の開催]

10 月 25 日（金）に、第 20 回青森県高等教育機関懇談会及び第 14 回青森県学校教育関係者合同懇談会が、当番校である本学を会場として開催されました。

この懇談会は、青森県内の高等教育機関及び学校教育関係者が一堂に会し、情報交換を通じて、青森県における高等教育機関及び地域の活性化並びに学校教育の発展に寄与することを目的としたものです。

青森県高等教育機関懇談会では、青森県内の大学、短期大学、高等専門学校、営農大学校、職業能力開発大学校の代表者が出席し、「グローバル化進展の中での地方大学の取組み」と「学力の実質化のための教育への取組み」について協議が行われました。

次に開催された青森県学校教育関係者合同懇談会では、先に開催された懇談会の出席者に加え、青森県 PTA 連合会・青森県高等学校 PTA 連合会・青森県高等学校長協会の代表者が出席し、「小・中・高と大学との連携の在り方」と「家庭と連携し、家庭教育力を高めていくための方策」について協議が行われました。

いずれの懇談会も、様々な意見が出され、活発な議論が行われました。また、参考になる意見も多数出され、大変有意義な懇談会となりました。

来年度は、八戸地区の学校を会場に開催される予定です。

（大学ホームページより）

[学生デザインによる夜店通り商店街の「のぼり」が完成]

経営学部 2 年の北川美里さん、三橋真理さん、村元美穂さんが共同して作成した「のぼり」デザインが、夜店通り商店街の「のぼり」に採用されました。

本取組は、昨年度より行われている「中心商店街にぎわい創出事業」の一貫として行われているものです。学生達は、商店街のコンセプト作りを行う過程で、商店街のシンボルとなるロゴマークを考案しました。この度、夜店通り商店街様のご厚意により、「のぼり」に採用していただき、完成品を本学に寄贈していただきました。

これからも商店街のにぎわいを取り戻すべく、活動を続けてまいります。

（青森大学ホームページより）

[災害避難訓練の実施]

11月5日(火) 4時限目(16時00分頃)に災害避難訓練を実施した。災害の想定は、強い地震発生、2次災害として1号館介護実習室付近より同時出火である。避難場所は中庭ステージで、参加者は学生1041名、教職員100名でした。この訓練の目的は次の3点でした。(1)青森大学に於ける防災の徹底を期し、地震・火災による人的・物的災害を軽減することを目的とする。(2)地震・火災発生の際には定められた経路に従い、安全かつ迅速に、授業担当者の指示に従い退避できるようにする。(3)避難行動は迅速かつ整然と行ない、とくに次のことを厳守する。ア 各号館内では早足で行動する。イ 号館外では駆け足で行動する。ウ 前行者の身体を押さないこと。エ 伝達以外は私語をつつしむこと。

（10月部長会資料より）

[学術講演会の開催]

11 月 13 日（水）に、本学学術研究会主催の学術講演会が開催されました。

講師に、日本銀行青森支店の宮下俊郎支店長をお迎えし、『国内外の金融経済情勢と青森県経済の現状』と題して、ご講演をいただきました。

講演では、まず、海外と日本の経済情勢について、消費や投資、輸出入といったトピックスからわかりやすく説明していただきました。続いて、青森県経済については「今が踏ん張りどころ」として、短観などの解説があり、さらに、これからの青森県経済の方向性についても、6 次産業化を軸にお話しいただきました。

貴重なお話に、学生・教職員は熱心に聞き入っていました。また、講演後の質疑応答が活発に行われました。

（青森大学ホームページより）

[大学間教職員支援(SD 研修会)の開催]

11月22日(金) 14:00～15:30に青森大学6号館記念ホールに於いて、研修会を実施しました。市内の各大学や弘前大学からも事務職員が集まりました。講師に、慶應義塾大学信濃町キャンパス事務長の上杉道世氏をお迎えし、「これからの大学のあり方と事務職員の役割」をテーマに、ご講演をいただきました。また、研修会終了後には、初の試みとして情報交換会も開催され、市内の各大学の職員同士で交流ができたことは、大変成果がありました。

（11 月部長会議事録より）

[交通安全講習会の開催]

12 月 4 日（木）、1・2 年生及び車で通学する学生を対象に、「冬道の交通安全等について」と題し、青森モータースークル・交通教育センターの猪股直仁氏による交通安全講習会を開催しました。

本格的な冬のシーズンを前に、登下校における冬道の運転での交通事故を未然に防ぐための啓発が目的です。 猪股氏からは、ゆとりを持って行動することや、急ブレーキにならないように道路状況を読みとる心構えが大切だと教えていただきました。

参加した学生たちは、熱心に聞き、冬道での運転に備えていました。

（青森大学ホームページより）

[平成 25 年度 読書感想文コンクール講評]

図書館長　堀端 孝俊

第 19 回読書感想文コンクールでは、応募総数 84 作品の中から、金賞 1 件、銀賞 1 件、銅賞 3 件が入選しました。以下は、12 月 9 日に開催されました表彰式において読み上げました入選作品に対する講評です。

金賞「Alex and the Amazing Lemonade Stand」　社会福祉学科 3 年　菊池 貴光

書名「ちっちゃなアレックスと夢のレモネード屋さん」リズ＆ジェイ・スコット著

小児がんを患うアレックスは、同じ癌をわずらう子ども達を救うために 1 杯 60 円の「アレックス・レモネード・スタンド」を始めましたが、その店がアメリカ全土に広がりをみせる中、わずか 8 歳半でその短い命を閉じました。彼女の生き方から「信念」について考えるようになったと菊池君は書いています。「人生がレモンというすっぱい果実をくれるなら、それで甘いレモネードを作ればいい」というアレックスが好きな言葉に彼女の信念を感じ取った菊池君は、日常生活の中で信念を持ち続けることは並大抵のことではないことにも気がつきました。菊池君は、この物語から風になびく一本の美しい花を心象風景として思い描き、自宅前で始めた小さなお店が種になりそれが非営利団体アレックス・レモネード・スタンド基金という花を咲かせたのだと読み取りました。この物語から賢い生き方より信念を持って生きることを学び、さらに自分を支える信念の中には親友の存在があり、その親友を支えることは誰かをまもる生き方につながる、そういう生き方にこそ社会福祉学科で学ぶ自分があると感じとったようです。読む人の心に訴える感想文だと思いました。

銀賞「風去れば」　薬学部 2 年　筒井 志帆

書名「-自叙伝らしくなく-　誰か故郷を想はざる」寺山修司著

三沢で開催された「寺山修司演劇祭 2013」に参加し、他の役者とともに精一杯の心の叫びを披露した筒井さんは会場が熱気につつまれているように感じたようです。日常生活に戻ってもすっかり寺山に取り憑かれている自分に気づき、短歌を詠んで心情を洗いざらい吐き出すことを考えました。今回、寺山修司の「誰が故郷を想わざる」を読み、彼の無数の短歌と対峙した筒井さんは、寺山が人生を科学的にではなく史的に物語ろうとし、真実を比喩を通して再現することに努めている、と受け止めました。さらに、寺山の物語は歴史と現実が織りなし、青森の風土とは切り離せないことにも気がつきました。青森大学の先生や寺山修司記念館の館長と知り合うことで、故郷の自然と言葉をこよなく愛した寺山の作品を読み解くには、北国の鰯雲の叙事詩的な広がりや強烈な津軽弁の実体験が必要不可欠であることが分かったようです。筒井さんはこれからも寺山修司に思いを馳せて自らの思想を広げることが、いずれ人生をふりかえるときに、必要なのではないかと考えているようです。寺山の作品を引用しつつ寺山文学の魅力を綴った印象に残る感想文だと思いました。

銅賞「メンタル強化メソッド 45」を読んで　経営学部 1 年　庄治 勝也

書名「メンタル強化メソッド 45」浮世満里子著

野球に勝ち、4 年後の就職活動にも結びつけるために自らのメンタルを鍛えたいとの思いから庄治君はこの本を選びました。辛い練習を前向きに捉えること、弱気な発言はミスを誘発しやすいこと、失敗体験は頭の中から捨て去ること、常に先を見据えて行動することでモチベーションを維持すること、

などメンタルを強化するには、自分自身の意識を変えて行く必要があることをこの本から学んだようです。

銅賞「石巻赤十字病院の 100 日間」を読んで　　経営学部 3 年　吉野 祐樹

書名「石巻赤十字病院の 100 日間」石巻赤十字病院、他著

東日本大震災の時、石巻赤十字病院における医療関係者の獅子奮迅の働きに強い感銘をうけ、吉野君はこの本を選びました。いつ夜が明けていつ暮れたのか記憶がない、心肺停止の幼児を抱きかかえ叫びながら駆け込んでくる人、恐怖と悲しみで表情を無くしている小さな子ども、などの生々しい描写から伝わる医療関係者の孤軍奮闘ぶりに仕事に対するプロ意識の高さ責任感の強さを感じ、社会に貢献するにはそれなりの覚悟が必要であることを理解したとのことです。

銅賞「MOMENT」を読んで　　ソフトウェア情報学部 1 年　伊藤 弘迪

書名「MOMENT」本田孝好著

「人は死の直前に何を願うのか」という問いかけに興味を持った伊藤君はこの本を選びました。主人公の学生が、ある末期患者から最後の願いを託され心が揺れ動いていく。世の中には病院を渡り歩き末期患者の願いを一つ叶えていく必殺仕事人伝説というものがあるがそれは一体誰なのだろう、患者はなぜその願いを叶えたかったのか、などのことを考えながら、主人公が患者の願いを叶えつつ成長していく姿に感銘を受けたとのことです。

[サイバー犯罪対策講座の開催]

12 月 11 日（水）、全学生を対象に、「サイバー犯罪の被害に遭わないために」と題し、 青森県警察本部生活安全部保安課のサイバー犯罪対策係長の小山内信也氏、工藤靖之氏と国際犯罪対策係係長の古川光春氏を講師にお迎えして、サイバー犯罪対策講座を開催しました。

オンラインショッピング等における危険性、スマートフォン等での利用が多くなっているＳＮＳにおける危険性、暴力団や違法薬物の根絶 について、身近な例を用いて、わかりやすく説明して頂きました。

参加した学生たちは、身近で、気軽に利用しているインターネットにおいてサイバー犯罪被害が年々増加している事を認識し、安全意識を高める良い機会となりました。

（青森大学ホームページより）

[平成 25 年度冬季教職員研修会の開催]

FD 委員会副委員長 角田

大学教職員全員が出席して、平成 25 年度冬季教職員研修会を 12 月 21 日（土）に実施した。今回は『地域社会に貢献し地域とともに生きる大学として何をすべきか』をテーマとして、松本大学学長の住吉廣行氏を講師に招いて研修を行った。

研修会の最初に崎谷学長から基調提言が行われ、建学の精神と基本理念にもとづいて本学の原点が「地域とともに生きる大学」であることを確認し、大学を取り巻く環境や大学に求められる役割の変化に合わせて「地域とともに生きる大学」として本学を再興させるときであることが示された。

住吉先生の基調講演

提言に続いて松本氏による基調講演が行われた。『地域とともに歩む松本大学～COC 機能を果たせる大学を目指して～』と題して、松本大学の成り立ちからこの 10 年間の地域における様々な取り組みの事例が紹介された。また大学の基本となる教育についての考え方、地域連携と COC としての大学の位置づけ・役割についての考え方、さらに将来に向けての戦略など、「地域ともに生きる大学」としての取り組みの重要なポイントが数多く示され、フロアからも多くの質問が出され活発な質疑応答が行われた。

研修会の後半では、本学における地域貢献の現状と今後の取り組みについての報告と質疑応答が行われた。最初に澁谷学長補佐より「本学における COC 機能の重要性」として今年度 COC 事業への申請状況と来年度申請に向けての課題などが示された。続いて小久保（ソフトウェア情報学部）と沼田（経営学部）より、今年度の地域連携の取り組み事例が紹介された。また坂井（ソフトウェア情報学部）より来年度以降のカリキュラムにおける地域貢献科目の組み込みの検討状況が報告された。報告後の質疑応答では地域連携におけるポイントや課題など、多くの意見や質問が出され、予定した時間を超えて活発な意見交換が行われた。

[青森山田高等学校と青森大学との高大連携協定締結・調印式]

12 月 24 日に、青森山田高等学校と青森大学との高大連携協定締結・調印式が行われました。青森山田高校と青森大学は、青森山田学園が経営する学校であることから、これまでも高大連携にあたる活動は数多く行ってきました。

今回の高大連携の協定は、これまでの高大連携の実績を基礎に、高校生と大学生を中心に据えた高大連携を強化、高大接続の段階に向けて進化させることを目的としています。このような高大連携の強化により、青森地域において両校が果たしてきた人材の育成への貢献をさらに高めていきます。

（青森大学ホームページより）

地域貢献センター

[中高生の薬剤師体験セミナーの開催]

8月31日(土)、青森県内の中高生を対象とした「薬剤師体験セミナー」を開催しました。記事の詳細は薬学部のところに載せています。

[「まちなかキャンパス」を開催]

7 月に連携協定を締結した青森商工会議所との最初の連携事業として、「まちなかキャンパス」を実施した。本事業は、大学の公開講座を中心市街地の公的施設を会場に開催するもので、連携協定を締結した 5 大学がそれぞれ取り組んでいる。本学では 9 月から 10 月に計 4 回実施し、のべ 83 名の参加があった。講師や講演タイトルは以下の通りである。ご協力いただいた先生方にはあらためて感謝申し上げたい。

日時	9月12日(木) 15時～	9月26日(木) 15時～	10月18日(金) 15時～	10月25日(金) 15時～
講師	櫛引素夫 (社会学部)	赤坂道俊 (経営学部)	角田均･小久保温 (ソフトウェア情報学部)	徳光幸子 (薬学部)
演題	新幹線とまちづくり	新しい小売業と 技術革新	ジオ･コンピューティング ～地理情報による 観光支援と街づくり～	青森地域と健康

会場	青森市男女共同参画プラザ		アスパム	
参加者数	44名	15名	13名	11名

商工会議所が会員各社に参加を呼びかけてくれたこともあり、企業経営者や金融機関、行政関係者などの参加も多く、オープンカレッジや出張講義とはまた異なる層に、本学の教育研究活動についてアピールすることができた。一方、今回が初めての試みだったこともあり、実施日時や会場、広報や集客などに関しては課題も多かった。来年度は、本学キャンパスで開催する公開講座を含め、運営方法を工夫して実施する予定である。

[北部上北地域の公共交通活性化に関する調査事業を受託]

地域貢献センターでは「北部上北公共交通活性化調査」を受託し、住民に対する質問紙調査などを実施している。野辺地町・横浜市・六ヶ所村の北部上北 3 町村では、今年度、バス交通を中心とした公共交通の活性化方策に関する調査を行っているが、その一部を受託したものである (合同会社青森コミュニティビジネス研究所からの再委託。受託総額 70 万円)。

具体的には、3 町村における交通事業者へのリアリングや住民の意識調査などを行い、同地区の公共交通事業が抱える課題の分析を行っている。調査結果は、来年度以降の 3 町村の公共交通政策に反映される予定である。

[「幸畑プロジェクト」が展開中]

大学が立地する幸畑地区の地域課題を、大学の人的・物的資源を活用して解決することを目指す「幸畑プロジェクト」については、「青森大学・短期大学ニュース」24号でも紹介したが、7月以降の主な動きとしては以下のものがある。

月日	事項
7月25日	幸畑連合町会の町会長と話し合い。幸畑地区の地域課題や大学との連携・要望事項についてヒアリング。
8月17日	幸畑西町会ふるさとフェスタに、音楽サークル Total Music Works メンバーが参加しバンド演奏を披露。
8月31日	連合町会納涼祭に、ねぶた祭学生実行委員会が参加しねぶた囃子を披露。
9月2～8日	幸畑地区住民を対象とした住民意識調査を実施 (800通配布、246通回収)。
9月1日～10月12日	幸畑小学校の児童とのねぶた合同制作・合同運行
10月5日	町会長の案内で幸畑団地の「まち歩き」を実施 (社会学科3年ゼミ)
10月12～13日	学園祭において研究発表の展示、エコマネーシステムのデモンストレーション、ミニワークショップなどを実施。
10月26日	幸畑団地「まち歩き」実施 (社会福祉学科3年ゼミ)
11月15日	幸畑フォーラム2013を開催 (視聴覚室)
11月～12月	幸畑地区における居住状況調査を実施

このうち、ねぶたの合同制作・合同運行と幸畑フォーラムについては別項で採りあげたので詳しくはそちらをご覧いただきたい。11月末から12月にかけて実施した居住状況調査は、「青森県住みかえ支援協議会」との連携のもと実施したものである。同協議会では今年度より3か年の計画で、空き家の適正管理等を支援する相談・住みかえ支援体制の整備に取り組んでいる。今後は、幸畑団地をモデル地区とした空き家の実態把握や住み替えニーズの掘り起こし、現地相談会などを実施していく予定である。

幸畑地区は本学にとって最も身近な「地域社会」であり、教育・研究のフィールドとしても魅力的な題材が揃っている。学園祭での展示や幸畑フォーラムでは、地域住民が幸畑に強い思い入れを持っていることも実感できた。今後は、より多くの教職員の参加を得ながら、地域住民との交流・連携を密なものにしていきたいと考えている。

[幸畑小学校とのねぶた作成と合同運行]

１０月１２日（土）と１３日（日）、青森大学の大学祭が行われた。１２日の夕方には、本学地域貢献センターの幸畑プロジェクトの一環として、幸畑小学校の児童がねぶたを大学から小学校まで運行した。ねぶたの題材は、児童が選んだ「ふなっしー」（船橋市非公認のゆるキャラ。青森の子どもにも何故か人気がある。）で、８月末から本学教職員、学生が援助して、週末に児童が集まって制作してきたものであった。「ふなっしー」に加え、青森山田学園が本年９月の渋谷ねぶた祭りで運行したねぶた「金王丸」を運行した。子どもたちと家族、地域の人々が集まって、ちょっと季節はずれのねぶたを楽しんでもらえ、とてもよかった。

『随想「大空を見上げて」第十九回　今年の大学祭』より

[幸畑フォーラム 2013 の開催]

青森大学の「幸畑プロジェクト」チーム（代表・菅勝彦社会学部長）と地域貢献センター（柏谷至センター長）は 11 月 15 日、学内で、幸畑地区の現状と将来像を考えるシンポジウム「幸畑フォーラム」を開きました。地区の皆さんと県庁、青森市役所、民間企業の方々に学生を合わせて約 120 人が参加し、高齢化と人口減少に対応するための地域の仕組みづくりについて議論しました。

須藤喜代行・幸畑連合町会長と田中志子・青森大学社会学部准教授、「元気町あぶらかわ街づくり委員会」事務局長の中﨑良次氏（青森大学非常勤講師）が基調報告し、また、限界集落・過疎問題に詳しい首都大学東京の山下祐介准教授をコメンテーターにパネルディスカッションを行いました。

須藤会長は 1960 年代末に造成が始まった幸畑団地の歴史を紹介しながら、一時は 6,300 人を数えた

住民が 2 割減って 4,800 人台になっていること、地域活動の拠点となる施設がなく、災害時に避難所となる施設もないこと、さらには空き家が増え、倒壊の危険がある建物の対処に苦慮していることなど、さまざまな課題を提示しました。

田中准教授は、幸畑地区全体を対象に、9 月に実施したアンケートの結果（配布数 800、回収率約 30%）を報告し、全体として「安全・安心」「自然の豊かさ」について満足度が高い半面、文化・娯楽施設やスポーツ施設に関する不満が大きいこと、家事や身の回りの細かな用事を頼める人がいないと答えた人が目立つことなどの特徴を挙げて「安心な地域づくりに、具体的なサポートをしてくれる人の存在は需要」などと強調しました。

中﨑氏は、油川地区の活性化への取り組みについて、江戸時代以前に遡る歴史や古参の住民の誇り、新住民の活動が相乗的に組み上がって効果を上げている様子を解説しました。また、「誰かが大号令をかけるのではなく、女性をはじめ皆がが少しずつ動けるような仕組みが必要。特に、街中に勤めている人が、家庭から地域に顔を出せるような活動の在り方を追究すべきだ」「住民の活動を盛り上げるには干渉し合わないこと。それで、それぞれの持ち味が生きる」などと述べました。

一連の報告を受けて、山下准教授は「空き家は移住希望者にとって貴重なストックともなる」「青森市ぐらいのサイズのまちになると、都市計画と各地区のコミュニティー論をどう結びつけていくかが鍵」「国の施策は縦割りで、東日本大震災からの復興にしても、生活再建そのものを考える省庁はない。住民の側から発信していく視点が大切。幸畑で起きている問題はここだけの問題ではなく、日本全国の問題」といった視点を提示しました。

さらに、「人口が減っていっても、それぞれの地域が地域としての役割を全うしていくことが大事。コミュニティーをどう配置し、どんな施設やバスを残していくか。単純に、人口が少ないから要らない、利用者が少ないから要らない、という問題ではない。『個』と『全』をキーワードに考えていくべきだ」と議論を総括しました。

（青森大学ホームページより）

[「科学の甲子園」青森県大会への運営協力]

11月9日(土) 青森県総合学校教育センターにおいて、平成25年度「科学の甲子園」青森県大会 (主催：青森県教育委員会・青森県高等学校教育研究会理科部会) が開催され、県内の高等学校から12チームが参加して、理科・数学・情報分野の筆記競技及び実験競技に取り組んだ。

この催しは、独立行政法人科学技術振興機構 (JST) が創設した全国大会の予選を兼ねており、今年度で3回目の開催である。

青森大学は県教育委員会との連携事業のひとつとして、大会運営に協力している。今回は、薬学部の熊﨑隆学部長が、「科学者の卵たちに贈る言葉」と題した講演を行った。

今大会で優勝した青森高校Aチームは、3月に開かれる全国大会に出場することとなっている。全国大会での健闘を期待したい。

[第1回高校生科学研究コンテスト開催]

高校生科学研究コンテスト実行委員会
委員長　上田 條二
幹　事　堀端 孝俊

青森大学主催第1回高校生科学研究コンテストが青森県教育委員会のご後援のもと、去る11月16日（土）に本学で開催されました。当日は天候にも恵まれ、県内各地から 9校113名の生徒が参加しました。本学としては初めての試みであったにもかかわらず大過なくプログラムを終えられたことは、生徒の指導に当たられた先生方、引率された先生方の熱意に支えられたものであり、心から感謝する次第です。

発表テーマは口頭発表18件、ポスター発表9件でした。口頭発表にはサイエンス部門とテクノロジー部門を設け、それぞれ15件と3件の応募がありました。ポスター部門には名久井農業高校から9件の応募がありました。どの発表も大変熱のこもったもので、各チームともテーマを掘り下げ、新たな知見を得ようと真剣に取り組んできた様子をうかがい知ることができました。中には高校生のレベルを超えると思われる研究発表もあり、県内高校における理科教育の質の高さを改めて認識させられるものでした。

審査の結果、最優秀学長賞は八戸北高校SSH地学班の「八戸市牛ヶ沢遺跡から産出した縄文土器の胎土分析」でした。縄文土器の胎土分析を行うにあたり、まず八戸市周辺の河川の堆積物を採集・分析し、各河川流域の地質の特徴を明らかにしています。その上で、調査対象とした牛ヶ沢遺跡から出土した土器の薄片中に含まれる鉱物の分析を行い、縄文時代後期では他の土地から土器が持ち込まれた可能性が高いことを突き止めました。この研究は、今年度の第34回青森県高等学校総合文化祭自然科学部門で入賞、第57回日本学生科学賞県審査(読売科学賞)で最優秀賞に輝いています。

サイエンス部門優秀賞は、青森南高校自然科学部の「月・太陽の色　～光を散乱する物質の正体～」でした。このチームは地平線近くの月や太陽の光が赤く見えることについて継続的に研究を行っています。大気中の水蒸気の量と波長による光の減衰の関係を種々の観測データをもとに調べています。この研究も、県高等学校総合文化祭自然科学部門で入賞、読売科学賞で優秀賞を受賞しています。

テクノロジー部門優秀賞は、三本木高校クリップモーター班の「最速クリップモーターカーを作ろう！」でした。近年「科学の甲子園」全国大会の実験種目として注目を集めているクリップモーターカーを、指定された材料とその量を守って組み立て、レースタイムを競うことで問題解決能力の向上を目指すという試みです。「コイルと磁石は近いほどよい」、「車軸を直接コイルで回転させること

ができれば...」など、物理学で学んだ内容が実験・改良に活かされており、大変良い取り組みであるとの審査員からの評価を得ました。

ポスター部門優秀賞は、名久井農業高校伝統野菜班の「蘇れ、伝統野菜～南部太ネギの栽培と消費拡大を目指して～」でした。青森県南部地方に南部太ネギという伝統野菜があります。耐寒性、多収性に富み甘くて軟らかい特徴がありますが、葉が軟らかく分岐点が一般のネギより広いため土が入りやすく成長点が隠れやすいという栽培上の困難があります。チームは、たて穴法を導入し栽植密度の違いが収量に与える変化を調べ、同時に食品成分分析も行い、太ネギが優れた品種であることも確認しています。地域伝統の食文化を守ろうとしている姿が印象的でした。

今回受賞こそ逃しましたが、青森南高校自然科学部物理班の「Catch the 逃げ水!!」も大変印象的でした。道路の傾斜、表面温度の違いなどによる逃げ水の変化の様子を科学的に探求する姿勢に複数の審査員から高い評価を得ました。身近な現象の中に研究に値するテーマが潜んでいることを教えてくれる大変優れた研究だと思います。

今回のコンテスト開催にあたり、県内の各高校の先生方から暖かいご支援をいただきました。弘前中央高校の木立徹先生には開催時期及び運営について適切なアドバイスをいただきました。コンテスト当日の引率教員と本学教員との間の意見交換会の場でも参加教員の方々から多くの貴重なご意見をいただきましたが、なかでも木造高校の笹浩一郎校長先生からは「県内の理科教育の発展のためにもこの科学コンテストをもり立てて行きたい」とのご意見をいただきました。また、コンテスト終了後には、八戸北高校の岩岡洋先生から、発表法、賞品、表彰の在り方、ポスターセッション、など多岐にわたる運営上の項目について貴重なアドバイスをいただきました。ここに深く感謝いたします。

参加した生徒の皆さんには、さらなる高嶺を目指して研究に励んで頂きたいと思います。今回の発表テーマの中には、先輩から受け継いで発展させたものが多くありました。研究は、そのテーマに対して先人は何を考え、何を目指し、どこまで明らかにし、何が未解決なのか、すなわちその分野の歴史と現状を知ることに始まります。そのことによって自らテーマを設定し、自らの力で探求し、そして、今までにない新たな知見に到達することが求められているのです。まさに、武道における修業の精神である「守・破・離」の世界がここにも広がっているのです。研究の内容をさらに深め、チームワークをより強固なものとし、発表の練習を繰り返し、来年の新たな舞台で皆さんのさらに成長した姿を見せて頂けることを心から期待しています。青森大学は、青森県における科学教育のひとつの拠点として今後も全力で高校生を応援いたします。

[地域連携コーディネーターのセミナーに参加]

11 月 28～29 日、和歌山大学の主催する「第 2 回地域と大学を繋ぐコーディネーターのための研究実践セミナー」に、柏谷センター長が参加した。本セミナーは、地域連携に関わる教職員・コーディネーターの人材育成、大学と地域の発展に向けた輿論づくり、地域型サテライト拠点の発展を目的とし、合宿形式で行われる研修セミナーで、今回が 2 回目の開催となる。

セミナーでは、まず先駆的事例発表として 3 大学 (兵庫県立大、高知大、和歌山大) の事例が紹介され、そこで採りあげられた 3 つのテーマについて、分科会 1 (具体的地域連携について) でより突っ込んだ質疑応答と相互討論が行われた。

2 日目は分科会 2 (コーディネーターの技術について) として、地域と連携する大学づくりのノウハ

ウ、学内認知を高める方策、コーディネーターの役割と資質、などについてグループ討論を行った。最後の全体会セッションで各分科会の報告と追加の討論が行われ、全日程を終了した。

全体会・分科会で紹介された事例のほかに、各参加校における地域連携の現状や課題について、率直な討論が行われ、本学の地域連携の在り方を考える上でもたいへん示唆に富む研修となった。

[地域貢献賞の受賞者が決定]

青森大学地域貢献センターでは、本学の基本理念である「大学の知的財産を活用することにより地域への社会貢献を行うとともに、地域との親密な交流を通じて地域から愛される大学となる」ことを具現化し、他の学生の模範となる個人又は団体を表彰する「地域貢献賞」を創設し、10 月に表彰対象となる学生・団体を公募した。

応募された地域貢献活動の中から、審査の結果、以下の活動を今年度の地域貢献賞に選定した。活動に参加した学生諸君の努力に敬意を表するとともに、今後のいっそうの活躍を期待したい。

同賞の表彰式 (賞状及び副賞授与) は 1 月に実施する予定である。

平成 25 年度 青森大学地域貢献賞

優秀賞：中心商店街にぎわい創出事業 (青森大学沼田チーム)

〔活動内容〕青森市「夜店通り商店街」のにぎわい創出を目的に、個店へのインタビューや来街者への聞き取り調査、中心商店街利用アンケート調査などを実施。その結果をもとに商店街のコンセプト、ロゴマークを考案し、商店街オリジナルの「のぼり」のデザインを担当した。

奨励賞 (8 件・順不同)

- ねぶた制作並びにねぶた合同運行 (青森大学ねぶた祭学生実行委員会)
- 幸畑プロジェクト活動支援 (プロジェクト K)
- 青森大学 BBS 会活動 (青森大学 BBS 会)
- 「あおもりクエスト」システムのためのコンテンツ制作 (まちづくり工房)
- 地域住民に向けた演技会の実施 (青森大学新体操部)
- 自立支援センターみらい野球指導ボランティア (青森大学硬式野球部)
- ちびっ子健康マラソン大会ボランティア (同)
- 青森市自由ヶ丘町会「夏の夕べ」ボランティア (同)

学習支援センター

学習支援センターでは、９月１８日の発足以降、１０月９日の運営委員会において平成２５年度後期の事業計画（下記、(a)～(h)）を決定し、続けて１０月２９日のセンター会議において各事業の担当センター員を確定した。また、これらの情報を全教職員に伝え、活動への協力を依頼した。

これまでの活動状況について、事業ごとに簡潔に説明する。

(a) 学習相談窓口の設置

・１１月７日以降、窓口を計３３回開設し、延べ１６件の相談を行った（１２月１３日時点）

(b) 学修時間・学修行動調査

・規程に基づき、教務委員会と合同で平成２５年度前期の調査を実施し、９月３０日に分析結果をまとめた

(c) 基礎演習向け「共通テキスト」の作成

・平成２６年度から開講予定の「基礎演習」及び「地域貢献基礎演習」等で使用することを目指して、テキスト構成の具体化や執筆依頼等の作業を進めている

(d) 学習環境の IT 化推進

・多くの授業で学習支援システムを利活用できるよう、教職員向け説明会の開催準備を進めている

(e) 学生スタッフの受入れ

・学友会やサークルとの連携を進める等、来年度からセンターの活動に学生を参画させるための土台づくりを進めている

(f) 学生によるミニセミナーの実施

・就職内定を得た４年生に講師を依頼して、これまで４回のミニセミナーを実施した（参加学生からは好評、参加学生数を増やすことが課題）

第１回（１１月２１日）　社会学部４年　近　孝義さん
「就職活動で役立つこと」

第２回（１１月２８日）　ソフトウェア情報学部４年　遠藤蒿大さん
「就職活動ホントの話」

第３回（１２月５日）　経営学部４年　本多彩乃さん
「就職活動で大事なことって何？」

第４回（１２月１２日）　社会学部４年　木明大樹さん
「医療機関のソーシャルワーカーに向けて」

・資格取得関係のミニセミナーの実施準備を進めている

(g) 教務委員会・FD 委員会・学生委員会等との共同事業

・１１月２６日に「基礎スタンダード 語ろう会」を実施した（教務委員会と連携）

・地域貢献センターやオープンカレッジとの連携も検討している

(h) 「集いのスペース」の設置準備

・「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」の採択にともない、運営主体の片方として、場所・利用方法について検討を進めている

青森大学オープンカレッジ

（１）青森大学オープンカレッジ概要について　［オープンカレッジ所長　雨森輝昌］

青森大学では、昭和５２年、本格的な生涯学習を推進する機関として青森大学文化センターを発足、その後、国の文教政策が「大学が生涯学習センターを自主的に開設し、社会人向け講座への解放を」と提言したことが追い風となって、平成２年には青森大学オープンカレッジとして新たなスタートを切り、以来今日まで、大学の研究、教育の成果を広く一般に開放する本格的な生涯学習常設機関として、順調な発展を遂げてきています。

昭和５２年度の開設から平成２４年度までの総受講生は３２千人です。

（一日単位としては１２５千人で、今年度は４月～１２月までで１，０８７人でした。）

本大学教員の協力体制により、３６年間にわたって、研究と教育の成果を社会に還元し、地域文化の向上と活性化に貢献してきた実績は、全国でも数少ない生涯学習機関として、極めて高い評価を得ています。

オープンカレッジの受講には年齢・性別・学歴等あらゆる制限がありません。大切なことは、自己を高め、新しい知識を身につけ、人生を豊かに過ごそうという意欲です。かつては、人生の初期においてすべての教育を行ってきましたが、これからは生涯にわたっての学習が人生を支える時代を迎えていると考えます。

（２）平成２５年度８月～１２月実施について

［オープンカレッジ市民大学 ］

実施状況は以下の通りです。

	日程	テーマ	講　師
第11講	8 月 30 日	「コンピューターのしくみ」	ｿﾌﾄｳｪｱ情報学部　　坂井雄介准教授
第12講	9 月 13 日	「日常的差別を読み解く」	社会学部社会学科　佐々木てる准教授
第13講	9 月 20 日	「精神障害とは何か」	社会学部社会学科学科長　藤林正雄教授
第14講	9 月 27 日	「叙情歌を楽しむ」	ｿﾌﾄｳｪｱ情報学部　　白岩貢准教授
第15講	10 月　4 日	「傾聴のすすめ」	経営学部経営学科　石塚ゆかり准教授
第16講	10 月 18 日	「高照神社の源氏物語」	社会学部社会学科　久慈きみ代教授
第17講	10 月 25 日	「世界遺産縄文講座と野外学習」	七戸町世界遺産対策室　小山彦逸室長補佐 民俗学研究家　成田敏先生
第18講	11 月　8 日	「はがき絵体験」	洋画家　張山田鶴子先生
第19講	11 月 22 日	「デジタルカメラ産業と日系企業の競争力」	経営学部経営学科　沼田郷准教授
第20講	11 月 29 日	「生涯学習のすすめ」	青森大学　崎谷康文学長

市民大学第２０講　崎谷学長の講義

市民大学第１７講　世界遺産縄文講座

市民大学第１５講　石塚准教授の講義

市民大学第１７講での記念撮影

［みちのく散歩みち］

ふるさとみちのくの名所、旧跡、文化財、自然、施設などを巡り､郷土の歴史や発展する姿を学ぶ講座です。実施場所は以下の通りです。

第５講　９月３日（火）　八戸市の過去と現代　八戸博物館、根城、櫛引八幡宮他

第６講　９月２４日（火）　津軽のリンゴ　リンゴ試験場、弘前りんご公園他

みちのく散歩みち第５講の様子

［大自然トレッキング］

大自然と触れ合い、森林浴を楽しみながらの

トレッキング講座です。９，１０月は以下の通りです。

第５講　９月５日　初秋の鞍掛山（岩手県）　　岩手山南麓８９７．１ｍ

第６講　１０月３日　紅葉の八甲田・毛無岱　　ﾛｰﾌﾟｳｪｲ利用

大自然トレッキング第５講　鞍掛山山頂にて

大自然トレッキング第６講　八甲田毛無岱

［夏休み植物のふしぎ観察会］

植物、特に花の観察を通して、植物についての理解を深めると共に、自然との触れ合いの仕方を身に付けることを目的に初めて開催しました。講師：藤田均　オープンカレッジ副所長

［源氏物語を読む講座］

久慈きみ代教授を講師に、源氏物語の「葵」巻を古文（原文）で計１０回に分けて読む初心者向けの講座でした。

植物のふしぎ観察会の様子

源氏物語講座の様子

［ソシアルダンス教室］

ストレスや運動不足を解消し、１０歳若返りです。主に初心者を対象にジルバ・ワルツ・タンゴのステップを学びました。　講師：元青森大学非常勤講師　原子昭先生

［油彩・淡彩画教室］

身近なモチーフを写生して、一枚の絵を仕上げました。張山先生に楽しく､優しく５回に渡って指導をいただきました。

講師：洋画家　張山田鶴子先生

ソシアルダンス教室の様子

油彩・淡彩画教室の様子

経　営　学　部

『ＩＴパスポート試験』（主催：情報処理推進機構）に向けての取組み

2009 年度からスタートした『ＩＴパスポート試験』は、今年で 5 年目を迎えます。この試験は、IT 化が進む現代社会において、備えておくべき IT に関する基礎的な知識・能力を有することが証明できる国家試験です。

経営学部では、合格をめざす学生らが夏休み・春休みの期間を利用し、短期集中型の講習会形式で取り組んでいます。またその成果は合格者を毎年出すという実績に表れ、最近４年間で 10 名を数えます。今年は講習会に 7 名の学生が参加し、今後の試験結果が待たれます。

学生自らの目標に向かって取り組むことで、短期間で急速に成長していく様子が、指導する立場として最も強く印象に残ります。またこの種の資格試験合格者は、就職にも強いという傾向が見受けられます。今後も、広く学生にチャレンジを呼びかけながら、これまでの対策講習会で得た多くの経験を活かした指導を行っていく考えです。

（文責：石川祥三）

【簿記会計 3 級補習授業の実施】

今回は 2 級受講者がなく、3 級受講者（経営学部 8 名、社会学部 2 名の合計 10 名を対象に 5 月の第 3 週、第 4 週、第 5 週の火、木曜日及び 6 月の第 1 週,第 2 週の火、木曜日の 16:20~17:20 迄の通算で 8 回実施した。

内容は日商簿記 3 級の商業簿記を中心とした個別問題、総合問題及び予想問題を中心に実施した。

（文責：恵良二郎）

【日本商工会議所主催　簿記検定試験】

平成 25 年 11 月 17 日（日）に実施された第 135 回日本商工会議所検定試験において、2 級合格者は該当者がなかったが、3 級合格者は見事 6 名の合格者が出た。

3 級合格者　　経 24042：館山　　巧
　　経 25062：津屋　耀平
　　経 25029：工藤　貴央
　　経 25077：三上　皐誠

経 25036：齋藤　優丞

社 23011：小野瀬早紀

中でも 3 級合格者の 2 年生の館山　巧君は 98 点の高得点で見事合格した。早くも 2 級取得に向けての意気込みを見せていた。年度内での検定試験はあと 1 回を残しているが平成 25 年度内に 2 級合格者を何とか 5 人以上の合格者を出したいと考えている。

近年一般学生が減少傾向にあり検定試験の成果を上げるには厳しい環境にあるが、今後大学理念に基づいた親身になっての個々の指導を徹底し、「簿記会計の青森大学」というイメージ・アップを少しずつでも広めていければと考えている。

（文責：　恵良二郎）

【ＭＯＳ試験の初合格者】

12 月より経営学部教務委員会からの依頼で実験的に実施していた、教務課小野さんの指導によるマイクロソフト社のＭＯＳ（マイクロソフトオフィススペシャリスト）試験対策講習で、指導を受けていた経営学部 1 年生（森ゼミ）の工藤貴央君（講習受講生は 1 名）が、12 月 21 日に行われた 1 回目の受験で見事合格しました。

工藤君はまだ 1 年生ですが、ＭＯＳは国際的にも通用する実務的な資格であり、多くの大学でも取得指導に力を入れている、履歴書にも記載できる企業が評価する就職にも大変有利な資格です。

（文責：　森　宏之）

【学識経験者による税理士試験免除決定について】

表題について平成 25 年 4 月 2 日付起案（内容：公認会計士の一部科目免除および税理士試験全科目免除の申請）にて平成 25 年 7 月 4 日付国税庁国税審議会より、審査の結果、税理士試験について全科目税理士試験の免除の適用を受け、「税理士試験免除決定通知書」の決定を受けましたので報告致します。

記

税理士法第 8 条の規定により受験を免除された科目

・税理士試験の会計学に属する科目（簿記論・財務諸表論）

平成 26 年 4 月に国税庁国税審議会より「官報」に掲載される予定である。

（文責：　恵良二郎）

【学識経験者による税理士試験免除決定について】の記載の一部訂正（平成 26 年 9 月）

[外部研究助成・事業助成]

助成機関：青森県商工労働部

受託組織：青森商工会議所･新たな食等提供業態創造調査研究会(座長：井上隆)

調査研究補助金：青森県むらおこし総合活性化事業補助金，1,540 千円

調査研究事業名：新たな食等提供業態創造調査･基本構想策定(執筆担当：井上隆)

[著書､論文､研究ノート､評論・書評､翻訳､寄稿､調査報告書など] 平成 25 年 7 月～12 月

赤坂道俊

［論説］

平成 25 年 7 月 13 日「非正規雇用の課題」『あおもり経済未知しるべ』〈60〉、『東奥日報』平成 25 年 7 月 13 日、朝刊。

平成 25 年 8 月 17 日「八食センターの活力」『あおもり経済未知しるべ』〈65〉、『東奥日報』平成 25 年 8 月 17 日、朝刊。

平成 25 年 9 月 21 日「原子力と地域振興」『あおもり経済未知しるべ』〈70〉、『東奥日報』平成 25 年 9 月 21 日、朝刊。

平成 25 年 10 月 26 日「TPP 参加と日本農業」『あおもり経済未知しるべ』〈75〉、『東奥日報』平成 25 年 10 月 26 日、朝刊。

平成 25 年 11 月 30 日「コーヒーチェーンの躍進」『あおもり経済未知しるべ』〈80〉、『東奥日報』平成 25 年 11 月 30 日、朝刊。

井上隆　「連携深化の必要性説く」『東奥日報』2013.8.21.

（書評：佐々木純一郎編著『地域経営の課題解決』2013.2. 同友館刊）

恵良二郎

［論文］

「デリバティブ取引に関する国際会計基準の動向」

---デリバティブ取引の開示を中心に---

青森大学『研究紀要』第 36 巻第 1 号（通巻 116 号） p 49~72

2013 年 7 月.

「NDF デリバティブ取引とその実際」

青森大学『研究紀要』第 36 巻第 2 号（通巻 117 号）p1～8

2013 年 11 月

「外国為替相場の決定とその理論」

弘前大学『弘前大学研究年報』に投稿

2013 年 10 月（平成 26 年 4 月以降に 3 名の査読後掲載予定）

中村和彦

青森県高等学校教育研究会商業部会・青森県高等学校商業教育研究会編（2013）『未来を切り拓くビジネス・チャレンジ・ノート』第 1 章 2 節、第 3 章 2 節を担当（青森県内商業高校サブテキスト執筆、監修）

沼田郷

[研究ノート]

「デジタル・スチル・カメラ生産における台湾企業の台頭と産業発展」『アジア市場経済学会年報』第 16 号、2013 年。

[論説]

「台湾企業の台頭と日本企業の役割ーデジタル・スチル・カメラの受託生産を事例として」

『研究紀要』青森大学学術研究会、第 36 巻　第 1 号、2013 年 7 月。

[連載]

東奥日報社　「ニュース力アップ」　2012 年 4 月より隔週連載中。

[学会報告、学会活動など]

田村早苗　8 月　東日本林業経済研究会（盛岡市）

東日本入会・山村研究会（秋田市）

恵良二郎　9 月　日本貿易学会東部部会研究報告会

日付：2013 年 9 月 28 日(土)15:00～17:00

場所：明治大学駿河台校舎リバティタワー15 階 1156 教室(於:明治大学)

テーマ：「貿易電子化の現状と今後の課題」

12 月　日本貿易学会東部部会研究報告会

日付：2013 年 12 月 07 日（土）15:00～18:00

場所：明治大学駿河台校舎研究棟 2 階 9 会議室

［学会新規承認］

8 月　日本簿記会計学会

本部：東京都豊島区西池袋 3-34-1 立教大学経済学部小澤康裕

10 月　世界経済研究協会

本部：東京都港区赤坂 5-2-41　財団法人　世界経済研究協会

沼田郷

7 月　多国籍企業学会監事（2013 年 7 月～2015 年 7 月）

9 月　先端技術研究会報告「台湾電子産業の発展と日本企業の役割」

（於：日本大学経済学部）

12 月　カメラ産業研究会報告「台湾デジタルカメラ産業の台頭と受託生産」

（於：日本大学経済学部）

渡部あさみ

平成 25 年 11 月 3 日　平成 25 年度秋季 東北経営・会計研究会「正規ホワイトカラー労働者の長時間労働と人事労務管理のフレキシビリティ」(於大鰐温泉不二やホテル)

[社会活動・地域貢献・講演など]平成 25 年 7 月～12 月

赤坂道俊

［講演］

平成 25 年 9 月 26 日、まちなかキャンパス青森大学公開講座「まちとくらしを考える」

演題：「新しい小売業と経営革新」、アウガ 4 階

［社会活動］

平成 25 年 7 月 3 日　第 1 回青森地方最低賃金審議会、青森合同庁舎 4 階会議室

平成 25 年 7 月 5 日　平成 25 年度青森県独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構運営協議会、青森職業訓練支援センター視聴覚室

平成 25 年 7 月 23 日　青森地方最低賃金審議会第 1 回青森県最低賃金専門部会、青森合同庁舎 4 階会議室

平成 25 年 8 月 8 日　第 2 回青森地方最低賃金審議会、青森合同庁舎 4 階会議室

平成 25 年 8 月 12 日　青森地方最低賃金審議会、第 2 回青森県最低賃金専門部会

平成 25 年 8 月 12 日　青森地方最低賃金審議会、第 3 回青森県最低賃金専門部会

平成 25 年 8 月 26 日　第 3 回青森地方最低賃金審議会、青森合同庁舎 4 階会議室

平成 25 年 9 月 11 日　第 4 回青森地方最低賃金審議会、青森合同庁舎 4 階会議室
平成 25 年 9 月 17 日　青森地方最低賃金審議会第 1 回産業別最低賃金検討小委員会
青森合同庁舎 4 階会議室
平成 25 年 9 月 20 日　青森地方最低賃金審議会第 2 回産業別最低賃金検討小委員会
青森合同庁舎 4 階会議室
平成 25 年 9 月 20 日　第 5 回青森地方最低賃金審議会、青森合同庁舎 4 階会議室
平成 25 年 10 月 9 日　青森地方最低賃金審議会、電気機械器具等製造業（産別）専門部会、
青森合同庁舎 4 階会議室
平成 25 年 10 月 15 日　青森地方最低賃金審議会、各種小売業（産別）専門部会、
青森合同庁舎 4 階会議室
平成 25 年 10 月 16 日　青森地方最低賃金審議会、青森県自動車小売業（産別）専門部会、
青森合同庁舎 7 階会議室
平成 25 年 10 月 21 日　第 6 回青森地方最低賃金審議会、青森合同庁舎 4 階会議室

井上　隆　　7 月　青森市中心市街地活性化協議会「中心商店街賑わい創出事業」(継続事業)
第 1 回懇談会、副座長、青森商工会議所(7/25)
8 月　青森県健康福祉部 青森県地域医療再生計画有識者会議　国際ホテル(8/1)
8 月　青森市都市整備部･青森市総合都市交通対策協議会(H25 年度第 1 回)､会長、
青森市福祉増進センター(8/26)
9月　青森市戦略的中心市街地活性化事業補助事業、青森市中心市街地活性化協議会宛
BLACK BOX地域創造事業に係る「推薦確認書」作成・提出(9/5)
「新町キューブ」オープン記念特別事業に係る「推薦確認書」作成･提出（9/13）
10 月　RAB・ニュースレーダー‘消費税増税で暮らしは･･･’コメンテーター(10/1)
10 月　青森市中心市街地活性化協議会「中心商店街賑わい創出事業」、第 2 回懇談会、
副座長、青森商工会議所(10/2)
10 月　青森市中心市街地活性化協議会　平成 25 年度　第 1 回運営委員会、副会長、
青森商工会議所(10/30)、青森市戦略的中心市街地活性化事業補助金案件ほか
10 月　青森市総合都市交通対策協議会､市バス孫内線一部運休協議意見集約(10/25～11/5)
11 月　青森県 むらおこし総合活性化事業補助・新たな食等提供業態創造調査、
第 1 回研究会、座長、青森商工会議所(11/14)
11 月　新たな食等提供業態創造調査、現地調査、金沢市武蔵ヶ辻第四地区第一種市街地
再開発事業、富山県氷見市ひみ番屋街ほか(11/20～22)
11 月　NPO 法人ひろだいリサーチ拡大理事会･兼･広域青函圏研究会(第 1 回)、
(一財)青森地域社会研究所会議室（11/26）
12 月　新たな食等提供業態創造調査、現地調査、高知市ひろめ市場他（12/4～6）
12 月　新たな食等提供業態創造調査、第 2 回研究会、座長、青森商工会議所(12/11)
12 月　青森市中心市街地活性化協議会「中心商店街賑わい創出事業」、第 3 回懇談会、
副座長、青森商工会議所(12/12)
12 月　新たな食等提供業態創造調査、現地調査、八戸市みろく横丁（12/26）

田村　早苗
8 月　青森市地域における再生エネルギーの利用と普及に関する調査研究委員会

（青森市）
農林水産省独立行政法人評価委員会(東京)
（一財）日本森林林業業振興会理事会（東京）
農林水産省独立行政法人評価委員会林野分科会（東京）
9 月　青森県公共事業評価委員会現地視察（むつ市）
青森県内水面漁業管理委員会全国研修会（東京）
10 月　青森県公共事業評価委員会（青森市）
ＩＢＭ主催第 27 回東北会議（山形市）
11 月　青森市地球温暖化防止協議会（青森市）
青森県循環型社会形成推進委員会（青森市）
青森市地域における再生エネルギーの利用と普及に関する調査研究委員会
（青森市）
12 月　青森県森林審議会

中田　吉光

・8 月 1 日～8 月 4 日　全国高等学校総合体育大会新体操競技会（佐賀県総合体育館）において「主任審判員」を勤める。
・8 月:全日本学生新体操選手権大会 12 連覇、
・9 月 2 日～4 日　日本赤十字社青森県支部と合同で救急法救急員養成講習会を開催する。
・9 月 7 日　教員免許状更新講習（マット運動並びに表現）を本学で開催する。
・9 月 9 日、10 月 21 日（月一平均計 6 回）　青森市立野内小学校クラブ活動（ダンス）講師を務める。11 月 11 日 14:50～同校においてクラブ発表会実施。
・9 月 12 日　大湊高校大学見学会において模擬授業（アスリートとアーティストの融合）を行う。
・9 月 15 日　第 24 回「健康まつり」サンワアリーナにおいて演技会を行う。
・9 月 24 日　青森中央高校において演技会を行う。
・10 月 3 日　本学において「FLYING BODIES」（新体操部のドキュメンタリー映画）を上映する。現在、11 月 30 日～テアトル新宿・12 月 12 日立川シネマシティー・12 月 14 日～テアトル梅田で上映。
・10 月 13 日　大学祭において「全日本学生新体操選手権大会 12 連覇記念公演」を開催、996 名の観客を動員する。
・10 月 17 日～10 月 20 日　全日本ジュニア新体操選手権大会（国立代々木第一体育館）において「上級審判員」を勤める。
・10 月 23 日　弘前第一中学校において演技会を行う。
・10 月 25 日～10 月 27 日　全日本社会人新体操選手権大会（山形市総合スポーツセンター）において主任審判員を勤める。
・11 月 21 日～11 月 24 日　第 66 回全日本新体操選手権大会（国立代々木第一体育館）において「上級審判員」を務める。
・11 月 28 日　ＮＨＫ青森「あっぷるワイド」18:10～にＬＩＶＥ出演する。
・11 月　　全日本新体操選手権大会準優勝
・12 月 1 日　市民と市政を結ぶ情報誌「広報しろいし」のキューブ新体操教室ジュニア選手への

メッセージとして掲載。

・12 月 7 日　ＡＢＡ青森朝日放送「ハッピー」9:35～の番組においてスタジオ・体育館とＬＩＶＥ出演する。

・12 月 10 日　ＡＢＡ青森朝日放送「スーパー J チャンネル」で新体操部員の「シルク デュ ソレイユ」オーディションの模様を放送される。

・12 月 11 日　ＡＴＶ青森テレビ「おしゃべりハウス」に出演する。

・12 月 17 日～1 月 27 日までの 6 週間、オランダ・ドイツで演技を披露する。23 都市 38 公演行う予定。延べ 20 万人が来場する。

中村　和彦

・平成 25 年 7 月　第 1 回青森県商業教育における高大連携推進協議会（於：アップルパレス青森ねぶたの間）

・平成 25 年 7 月　高大連携推進事業会議（於：青森大学）

・平成 25 年 7 月　高大連携推進事業　大学訪問（於：青森大学）

・平成 25 年 9 月　大湊高校（模擬授業）

・平成 25 年 11 月　第 2 回高大連携推進協議会、サブテキストを活用した授業参観（於：青森商業高校）

・平成 25 年 12 月　「観光行政のイノベーション～台湾と青森市の観光振興のために～（中国文化大学・青森公立大学・青森大学)」パネリスト（於：ブラックボックス）

沼田　郷

10 月　中心商店街にぎわい創出事業会議　（於：青森商工会議所）

10 月　青森市社会資本整備再評価会議　　（於：青森市役所）

10 月　青森大学学園際　商店街にぎわい創出活動、東日本大震災支援活動報告

11 月　夜店通り商店街のぼり完成（学長報告）

12 月　夜店通り振興組合打ち合わせ　（於：夜店通り振興組合事務所）

12 月　中心商店街にぎわい創出事業会議　（於：青森商工会議所）

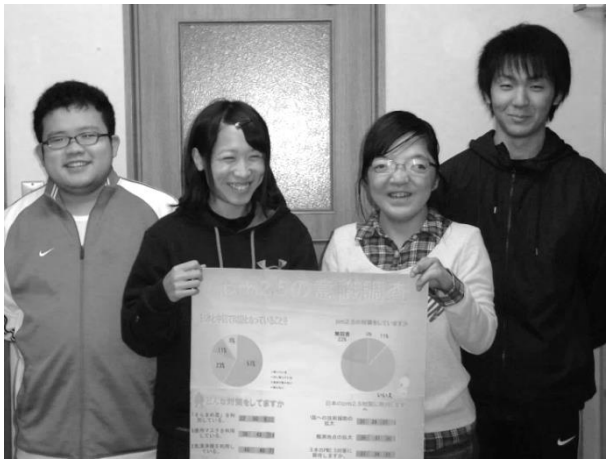
12 月　夜店通り商店街のホームページに「のぼりに込めた想い」を掲載

社　会　学　部

社会学科・社会福祉学科

[青森県統計グラフコンクールに部門2位]

平成 25 年 10 月 25 日、青森県統計グラフコンクールのパソコン部門で、社会学部 2 年鈴木ゼミの石岡雄太、福士紗恵、宮川あかり、菊池晃俊の 4 名の作品「日本に迫る！大気汚染微小粒子状物質 PM2.5」が入選（部門 2 位）に輝きました。(下の写真では、右から菊池、福士、宮川、石岡。下の統計グラフは応募作品の試作段階のものです。)　（鈴木康弘）



[社会学科 4 年田中匠瑛君が国体で 2 位など飛躍の年]

今シーズンは大活躍の年となりました。本学陸上競技部の田中匠瑛君（社会学科４年：青森山田高校出身）は８００ｍを専門としており、天皇賜盃第８２回日本学生陸上競技対抗選手権大会で３位、第６８回国民体育大会陸上競技では２位という輝かしい成績をおさめました。シーズンを終えた田中君は、「皆様の御声援が力となりました。本当にありがとうございました。来年も頑張ります」と、語ってくれました。今後も田中君の活躍に期待しています。（木原　博）

[学術研活動企画実施]

12 月 11 日(水)に社会学部学術研究会の学生研究発表会を実施し、参加ゼミは、基礎演習Ｂ（船木・久慈合同）＆社会学演習Ⅳ（久慈ゼミ）であり、社会学科の卒業生鈴木綾氏（特定非営利活動法人ビーンズふくしま副理事長）を講師に招き、ワークショップ等のあり、意義ある発表大会となった。

[第六回業界研究会を実施]

12 月 5 日(木)の 4 時間目に経営学部と社会学部 3 年生対象の文系対象の業界研究会(今回で 6 回目)が本学の 350 教室にて実施されました。今回は、東和電材(株)の石沢秀光総務部長と老人保健施設カトレアの中井堅司副施設長(本学卒業生)とネッツトヨタ青森の山崎泰代氏（本学今年度卒業生）の３氏が参加され、受講した 3 年生は「本学の若い卒業生の話を直接聞けて参考になった」と話していました。

[経営・社会学部グループ内定報告会を実施]

12 月 19 日（木）の 4 時間目に 3 号館 2 階において経営・社会の 4 年生 12 名の内定者報告会（内定先：青森県警、かんぽ生命保険、ヤマヨ、紅屋商事、東和電材、宮古信用金庫、今別役場、ユニバース、聖パウロ病院など）が開かれ、4 年生が具体的にどのようにして内定をとったのかを 3 年生に伝授しました。12 月に就活が解禁され、12 月スタートは今回で最後となりますが、就職活動がまだよく分かっていない 3 年生にとって今回の 4 年生の具体的な話は大いに参考になったと推測されます。参加した 3 年生は、「4 年生の話がリアルで、非常に刺激になった」とコメントしていました。

[精神保健福祉援助現場実習]

平成 25 年度は 10 名（3 年生 7 名、4 年生 3 名）の学生が実習を履修しました。体験実習が 6 月から始まり、夏休みを中心に後期の 11 月 6 日で最後の学生が実習を終了しました。1 人の脱落者もなく実習を終えることができました。ただ、現場実習指導者からは知識不足、コミュニケーション力不足、社会性の弱さなど厳しい指摘を頂いた。これからの実習指導を通してどのように学生を育てるかが問われていると言えます。

また、昨年度体調不良で現場実習のみを残し単位保留となって学生２名も、前期と夏季休業中に実習を行い無事終えることができました。(藤林正雄)

[社会福祉学科国家試験対策委員会より]

今年度の国家試験は平成 26 年 1 月 25・26 日です。試験まで残り 1 か月をきりました。受験生は、23 名（社会福祉士 18 名、精神保健福祉士 11 名、うちダブル受験 6 名）です。

前期に行われた月 1 回の学内模擬試験の成績をもとに弱い科目を中心に 9 月 9 日から 11 日まで夏季特別講座、10 月 25 日全国統一模擬試験、11 月 28 日学内模擬試験と学習意欲の向上とその継続を目指して指導しています。グループ学習、個別学習など学生個々人の学習スタイルに合わせて熱心に勉強を続けている学生が多くなっています。

合格発表は平成 26 年 3 月 14 日（金）です。多くの学生が合格できるよう、最後まで指導していきます。(藤林正雄)

[ソーシャルワーク演習 D　（田中担当）]

ソーシャルワーク演習 D では、「社会福祉の視点から地域をみる」をテーマとし、３つのグループに分かれて幸畑１～５丁目の資料収集と街歩きを行いました。10 月 26 日（土）には 13 名が「児童グループ」「障害グループ」「高齢グループ」に分かれ、「障害グループ」は車いすに乗り、「高齢者グループ」は高齢者疑似体験セットを装着して幸畑地域を歩き、それぞれの視点から町のよいところ、不都合なところなどを確認しました。現在はこの３つの班が既存資料や自分たちが街歩きで気がついたことを整理し、1 月の報告会に向けて報告準備をしています。（田中志子）

[日本商工会議所主催　簿記検定試験]

平成 25 年 11 月 17 日（日）に実施された第 135 回日本商工会議所簿記検定試験において、社会学部より今回初めての合格者 1 名が出ました（3 級合格者：社 23011　小野瀬早紀）。小野瀬早紀さんは 93 点の高得点で見事合格しました。早くも就活をも視野にいれて 2 級取得に向けての意気込みを見せています。（文責：恵良　二郎）

[学術論文・著書] (五十音順)

櫛引 素夫　「東日本大震災　弘前大学からの展望[2011-2012]　－それぞれの 3.11－」（共著）弘前大学震災研究交流会編、弘前大学出版会、pp252、2013.9.

「北海道新幹線開業への課題－道南地域と青森県を中心に」『青森大学紀要』、36(2)、pp33-52.

澁谷 泰秀・渡部 諭（2013）「高齢者の社会情動的選択性とリスク志向性が生活の質に及ぼす影響」、『青森大学研究紀要』、36(2)、pp9-32.

中村 和生・浦野 茂・水川 喜文 2013 「「心の理論」と社会的場面の理解可能性 ── 自閉症スペクトラム児への療育場面のエスノメソドロジーにむけて ── 」『年報社会学論集』（関東社会学会）第26号, 159頁―170頁.

水川 喜文・中村 和生・浦野 茂 2013 社会生活技能訓練におけるカテゴリーと社会秩序 ── 自閉症スペクトラム児への療育場面のエスノメソドロジー ── 」, 『保健医療社会学会論集』第24号第1巻, 31頁－40頁.

[学会発表など] (五十音順)

櫛引　素夫　「災害と報道の狭間－地域防災力強化への視点－」弘前大学震災研究交流会、2013 年 12 月 10 日、コラボ弘大（弘前大学）

渡部諭・澁谷泰秀（2013）．「Taxometric分析を用いた振り込め詐欺に対する高齢者の脆弱性の検討」, 日本行動計量学会第41回大会, 2013年9月5日,東邦大学

澁谷泰秀・渡部諭・吉村治正（2013）．「高齢者のフレーミング効果と意思決定モード：項目反応理論と古典的テスト理論の相補的活用」, 統計関連学会連合大会, 2013年9月11日, 大阪大学

渡部諭・澁谷泰秀（2013）．「若年者および高齢者における振り込め詐欺被害傾向の相違について-taxometric methodによる分析」, 日本認知科学会第３０回大会, 2013年9月23日, 玉川大学

渡部諭・澁谷泰秀（2013）．「高齢者の詐欺犯罪脆弱性に関するtaxometric分析」, 人工知能学会研究会, 2013年12月22日, 岩手県立大学

藤　公晴　「アメリカの事例（１）」諸外国の青少年教育施設等調査　文部科学省＆国立青少年教育振興機構合同研究会、会場：国立オリンピック記念青少年総合センター、7 月 1 日.

[報告書・書評・寄稿など] (五十音順)

櫛引　素夫　「新聞労連・産業政策研究会　最終報告書 2013　この山をどう登るか」（総括・執筆分担）、新聞労働組合連合、2013.9.

久慈　きみ代　「没後 30 年寺山修司を探して⑥」編集少年の才能　デーリー東北：7 月 11 日（木）付.
青森県近代文学館「特別展寺山修司没後 30 年」（7 月 13 日～9 月 8 日）図録へ寄稿.

藤　公晴　アメリカにおける青少年教育施設等の調査報告（平成 24 年度文部科学省受託事業）、「諸外国の青少年教育施設等調査」報告書　独立行政法人国立青少年教育振興機構、平成 25 年 3 月.
特集　諸外国の青少年施設調査　文部科学省・国立青少年教育振興機構合同研究会（発表報告）
独立行政法人国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター紀要第２号、平成 25 年 11 月.
テーマ：Bioregionalism in Japan に関して研究者：Julie Celnik（フランス社会科学高等研究院（Ecoles des Hautes Etudes en Sciences Sociales）Paris FRANCE）に対する研究協力支援、平成 25 年 8−9 月.

野﨑　剛　「青森ねぶたと青森山田学園ねぶた　第 4 回―青森山田学園ねぶたの歴史（後編その１）―」青森大学ホームページ〈青森山田学園ねぶた〉（http://aomori-yamada.jp/nebuta/）2013 年 11 月 29 日.

[出張講義・講演など] （五十音順）

櫛引　素夫　新聞労連・産業政策研究会全国集会（主催、ワークショップ講師）、2013 年 8 月 24-25 日、

東京都文京区・アカデミー茗台.

宮崎日日新聞労働組合・産業政策研究講演会講師「宮日の明日・宮崎の未来」、2013 年 8 月 27 日.

宮崎公立大学・ジャーナリズム論ゲスト講義（水野剛也教授集中講義）「宮崎の明日はどちだ!?－メディアの行方と若者の未来」、2013 年 8 月 28 日.

第 2 回青森大学オープンキャンパス模擬授業「新幹線「はやぶさ」と青森」、2013 年 9 月 7 日.

青森大学・青森商工会議所「まちなかキャンパス」第 1 回講演「新幹線とまちづくり」、2013 年 9 月 12 日、青森市男女共同参画プラザ.

青森市観光ボランティア交流会・講師「「はやぶさ」のある風景とボランティア」、2013 年 11 月 1 日、青森市文化観光交流施設「ワ・ラッセ」.

観光カリスマ角田周氏主催シンポジウム・東北新幹線新青森開業 3 周年記念「新幹線活性化カリスマ放談」、2013 年 12 月 4 日、青森市男女共同参画プラザ.

新聞労連・消費税対策検討チーム・検討会コーディネーター、2013 年 12 月 15 日、東京都文京区・新聞労連本部.

青森公立大学・金融学習会講演「新幹線とまちづくり」、2013 年 12 月 18 日.

久慈　きみ代　8 月 18 日（日）講演　青森県近代文学館　文学講座２

「寺山修司のことばー内部から成長をはじめるときが来たー」.

9 月 29 日（日）講演「誰にでもわかる寺山修司」つがる市稲垣いこいの里物産館ギャラリー.

9 月 28 日（土）出演　ＮＨＫラジオ深夜便　「寺山修司が残したもの」.

10 月 23 日（水）出演　BS 朝日 昭和偉人伝「寺山修司」学生・大学・久慈.

11 月 11 日出演　ＮＨＫテレビ（東北版）「今こそ！寺山修司」.

柏谷　至　「少年犯罪は『凶悪化している』か?～社会調査はじめの一歩～」青森大学オープンキャンパス, 2013年5月18日.

「少年犯罪は『凶悪化している』か?～社会調査はじめの一歩～」青森中央高校「大学見学会」, 2013年6月27日.

「参加と協働を通じた地域づくり～NPOに学ぶ活動活性化のヒント～」三戸郡選挙管理委員会連合会 合同研修会 (青森県明るい選挙推進協会・出前講座事業。平川市), 2013年10月10日.

ワークショップ「議論の仕方を議論しよう」(財)明るい選挙推進協会「若者リーダーフォーラム (北海道・東北ブロック)」(山形市), 2013年10月19日.

ワークショップ「“あったかいお金”を交換しよう～エコマネー・ワークショップ～」 五所川原小学校「学校支援ボランティア講演会」(五所川原市), 2013年10月24日.

藤林　正雄　（出張講義）

9.20　オープンカレッジ市民大学　「精神障害とは何か」.

10.16・18　「傾聴のススメ 2013～傾聴を学ぶ～」　青森市男女共同参画プラザ・カダール.

11.6　「趣味をもつこととストレス対処法」　青森市戸山市民センター.

12.10「傾聴について」（平成 25 年度青森シニアカレッジ事業）県長寿社会振興センター.

12.11「援助職における対人関係の持ち方」（平成 25 年度地域ケア会議）五所川原市地域包括支援センター.

12.19「傾聴とゲートキーパー」（ゲートキーパー育成事業研修会）青森県歯科医師会.

（講演）

10.12　「こころの健康づくりフォーラム」発言者　五所川原市.

10.22・29（２回）「誰かの心のサインに気づくことができますか」「誰かの命を守るためにあなたができること」　おいらせ町.

11.20　「自立した生活を目指し～福祉制度を利用して自立するために～」中弘南黒地区精神障害者家族学習交流会　ＮＰＯ法人青森県精神保健福祉連合会.

11.23「傾聴のススメ」（気仙沼市女性のためのコミュニケーションスキルＵＰ講座Ⅱ）内閣府、宮城県気仙沼市、全国女性会館協議会.

11.26・12.6・24（3 回）「平成 25 年度ゲートキーパー研修」七戸町.

12.5「精神障害者の理解（青森市市民後見人養成研修）」ＮＰＯ法人青い森ねっと.

12.8「傾聴のしかたを学ぶ」　メンタルハート八郎潟（秋田県）.

[地域活動] (五十音順)

柏谷　至　　特定非営利活動法人グリーンエネルギー青森 副理事長 (2002年より)。特定非営利活動法人アニマルサポート青森 監事 (2004年より)。大鰐町地域公共交通会議 委員 (2009年より)。一般社団法人グリーンエネルギー鰺ヶ沢 理事 (2011年より)。青森県明るい選挙推進協議会 委員。青森県新産業創造課「イノベーション・ネットワークあおもり」タスクフォース・メンバー (2013年4月より).

鹿角市新エネルギー利活用促進協議会 委員長 (2013年10月より)、国家公務員倫理審査会「公務員倫理モニター」、鰺ヶ沢再生可能エネルギー協議会 コーディネーター (2013年11月より).

櫛引　素夫　NPO 法人青森県防災士会理事（2012 年 4 月～）.

新聞労連・産業政策研究会座長（～2013 年 9 月）.

新聞労連・消費税対策検討チーム・コーディネーター（2013 年 12 月～）.

青森商工会議所・あおもり検定監修委員（2013 年 7 月～）.

青森地方労働審議会委員就任（2013 年 9 月～）.

青森地方労働審議会・青森県電気機械器具製造業最低工賃専門部会委員就任（2013 年 12 月～）.

青森県情報システム課オープンデータ勉強会参加（2013 年 8 月～）.

青森県オープンデータ実践交流マッチング「税金はどこへ行った？」ワークショップ参加（2013 年 11 月～）.

青森大学・幸畑プロジェクト・メンバー（青森大学祭展示監修・幸畑フォーラム企画・居住実態調査実施・交流事業参加）.

青森県住みかえ支援協議会・幸畑空き家実態調査受託（2013 年 11 月～）.

徳島県すだち PR 企画「すだまりプロジェクト」活動支援及び青森大学との交流企画（2013 年 11 月 13 日、青森市・弘前市）.

久慈　きみ代　8 月 3 日　三沢市寺山修司記念館・ハービー・山口写真展　学生と参加.
8 月 10 日＆8 月 31 日・幸畑阿部野地区　幸畑祭りに学生と参加.
9 月 22 日（日）～9 月 23 日（1 泊）・寺山修司演劇祭２０１３第 1 回　於星野リゾート青森屋.
「寺山修司へのオマージュ」に青森大学演劇団「健康」と「幸畑文学」が参加.
11 月５日（５日５月７日～１１月５日までの火曜日 10 回）
オープンカレッジ「源氏物語を読む」（10 回目）終了.

藤　公晴　　9 月 4 日　青森県環境審議会.

藤林　正雄　青森県精神医療審査会　8 月、10 月、12 月、その他退院請求に伴う意見聴取.
社会福祉法人花評議員会、理事会 8 月 11 月.
ＮＰＯ法人あおもりいのちの電話研修委員会毎月、理事会 11 月.
青森県運営適正化委員会苦情解決部会 9 月 11 月.
福祉サービス第三者評価推進委員会委員 8 月.
青森県社会福祉協議会第三者評価調査（利用者調査を含む）8 月・9 月.
青森県精神保健福祉士協会監事（「事務局のあり方委員会」）.

ソフトウェア情報学部

[大学祭への参加]

ソフトウェア情報学部では、10月12日(土)、13(日)に行われた大学祭で、学部及び各研究室(石田研、小久保研、坂井研、角田研、矢萩研、和島研)の紹介、ETロボコン紹介とデモ(橋本研)、名刺作り(堀端研)、謎解きはティータイムの前に(緑川研)を出展した。また、今回はデジタルコンテンツサークルが初めて参加した。

[ソフトウェア情報学部 業界セミナー開催] (石田 努、李 孝烈)

ソフトウェア情報学部では、12月5日(木)に株式会社コンシス代表取締役・大浦雅勝様、dct-design 代表・蝦名晶子様を講師にお招きし、第8回目となる業界セミナーを行った。

大浦様からは地方の特徴を活かしたIT事業の取り組みについて、蝦名様からは仕事を進める上での人と人の繋がりの重要性について講話があり、これから就職活動を迎える3年生へ、また、将来の進路を考えている2年生へ貴重なアドバイスをいただいた。

[創作ゼミナール成果発表会] (坂井 雄介、李 孝烈)

12月14日(土)9:00～13:00に、5102教室において3年生全員による成果発表会が実施された。「創作ゼミ

ナール」は、2年次終了時に配属された研究室において、教員の指導のもとで、学生が主体的に研究テーマの設定、研究・開発、及び成果発表と報告書作成を行う、本学部の主要科目の一つである。なお学生は、これらの活動の中で得られた知見や成果物を、就職活動の中でアピールできるようにもなっている。

今年度も、制作したソフトウェア、コンテンツ、及び組込みシステムやロボット設計などの多様なテーマに関して発表やデモンストレーションが行われ、教員・学生双方による活発な質疑応答が交わされた。

[ＣＧ（コンピューターラフィックス）検定合格率 68.8%] (緑川 章一)

ソフトウェア情報学部の学生が受験した、2013年度後期ＣＧエンジニア検定（ベーシック）の結果は、受験者16名の内、合格者11名で合格率 68.8%と、これまでにない高い合格率であった。

合格者の内訳は、

ランクＳ (100点～90点)　2名
ランクＡ（ 89点～80点）　3名
ランクＢ（ 79点～60点）　6名

でした。今年度の授業の教科書を新しくするなどしたこと、また、学生のみなさんが努力したことで、このような、よい結果になった。この分野における合格率の全国平均は、例年、60%前後であることからも、学生の頑張りがうかがえる。ＣＧの技術は、様々な分野で重要になっている。

ソフトウェア情報学部では、これからもコンピュータグラフィックスの教育を充実させていきたい。

[ETロボコン2013東北地区大会でシルバーモデル受賞] (橋本 恭能)

9月23日（月）岩手県盛岡市のアイーナ（いわて県民情報交流センター）で、ETロボコン2013東北地区大会が開催された。東北各地の企業、大学、高専、高校など25チームが参加し、ロボットの走行タイムやソフトウェアシステムの設計内容で競い合いました。ソフトウェア情報学部橋本研究室とETロボコン研究会の合同チーム「青大ロボコン研」（4年遠藤嵩大、寺山皓貴、渡邊光児、3年金子晋、山田賢太朗）は、ソフトウェア設計モデルを審査するモデル部門において、シルバーモデル（第3位）を受賞した。

[青森商業高校課題研究指導] (小久保 温、角田 均)

青森県高等学校教育研究商業部会との高大連携推進協議会の取り組みの一環として、青森商業高校3年生8名を対象に課題研究の指導・サポートを行った。

ソフトウェア情報学部で開発したバーチャルリアリティマップシステム"OctPhotoVR"を使って青森商業高校を仮想空間で再現する作業に高校生が取り組んだ。

5−6月に大学で4回の開発レクチャーを行い、ソフトウェア情報学部の3,4年生が指導とサポートを行った。後期にも高校で追加指導を行い、12/19に青森商業高校で行われた生徒による成果発表大会では、発表8チームの中で見事に1位を獲得した。

[県内商業高校での講演] (小久保 温、角田 均)

青森県高等学校教育研究商業部会との高大連携推進協議会の取り組みの一環として、以下の2校で情報技術の魅力に関する講演を行った。

7/17 青森商業高校1年生全員 講師:角田

9/11 三沢商業高校1年生全員 講師:小久保

講演では「社会を支える情報技術～これからの仕事と生活～」というタイトルで、情報技術の成り立ちとその本質を紹介し、情報技術による社会のイノベーションと今起こりつつある変革を、AR(拡張現実)などの実演を交えながら紹介した。

[県内商業高校による合同大学訪問] (小久保 温、角田 均)

青森県高等学校教育研究商業部会との高大連携推進協議会の事業として、県内の6商業高校による県内大学の合同訪問を実施した。

7/30の青森大学の見学では経営学部とソフトウェア情報学部による模擬授業を実施した。

ソフトウェア情報学部では小久保による講演(「ビッグデータが変える仕事のかたち」)と、CG系の研究室グループに所属する3,4年生による研究紹介を行い、青森商業高校、黒石商業高校、三沢商業高校、弘前実業高校、八戸商業高校の1年生と2年生約44名が聴講した。

[「あおもりクエスト」の開始] (小久保 温、角田 均、柏谷 至、工藤 雅世)

株式会社リンクステーションとの連携による地域共同事業として、大学生による地域の社会見学「あおもりクエスト」を開始した。

見学先として青森県立郷土館、青森県立美術館、縄文時遊館、マエダアリーナ、あおもり街てくの5ヵ所を設定、学生は自由な時間に見学し、専用のカードを使って設置された端末にタッチすることでスタンプラリーの形で運用できるようにした。

学生に配布するFeliCaカードのデザインをソフトウェア情報学部の学生が担当し、見学先のキャラクタなどを使った独自デザインのカードを作成、社会学部とソフトウェア情報学部の学生約170名に配布した。また各見学施設に設置するFeliCa端末のコンテンツ制作もソフトウェア情報学部の学生が担当した。

見学は後期の授業(ゼミ、演習)の一部として実施しており、年度末に報告会等の実施を予定している。

[小学校との連携による環境教育の高度化研究] (角田 均)

前年度に引き続き、六ヶ所村立尾駮小学校との共同研究として、ソフトウェア情報学部で開発した3次元地理情報システム「デジタル青森」を活用した、小学校での自然学習の高度化に取り組んでいる。

今年度はソフトウェア情報学部の4年生2名が卒業研究の一環として研究を進めている。7月に実地調査のために尾駮小学校4年生による尾駮沼での自然観察授業に同行、取材を実施した。また、水環境学会東北支部による水質評価の取組みとして「水のすこやか調べ」のアンケートも実施した。

小学生による観察記録と水質評価データを電子化し、デジタル青森上で俯瞰、表示できるようにシステムを構築し、11月から尾駮小学校で成果として展示している。また展示システム用に、観察風景の写真をスライドショーで表示できる機能も追加した。3～5年生にシステムについてのアンケートを実施、評価を行い、1月に東北大学で開催される水環境学会東北支部研究会で学生が成果発表を行う予定である。

[黒石商業高校課題研究] (小久保 温、角田 均、和島 茂)

平成25年3月19日に、黒石商業高校情報処理科2年生全員に対して、OctPhotoVRのコンテンツの制作方法に関し「情報処理特別授業」を実施した。この授業を受けた生徒が3年生になり、「課題研究」のループの一つがOctPhotoVRによる黒石こみせ通りのバーチャルリアリティマップの制作に取り組んでいる。OctPhotoVRは、青森大学でHTML5×CSS3×JavaScriptにより開発したシステムで、青森大学の教員と学生が、本課題研究に取り組んでいる黒石商業高校の生徒に以下の技術指導を行った。

7月29日　コンテンツ制作上のトラブルの解決方法の紹介

10月16日　地図にパノラマ画像を配置する方法の紹介

11月6日　情報ウィンドウ、ショートカットの作成方法の紹介

[第10回ICTユビキタス・フェア2013 inあおもり] (小久保 温)

10月31日(木)、11月1日(金)10:00-18:00に青森駅前のアウガで、第10回ICTユビキタス・フェア2013inあおもりが開催された。青森大学ソフトウェア情報学部は、ソフトアカデミーあおもりのブースにおいて共同で出展した。

第10回ICTユビキタス・フェア2013inあおもりは、一般社団法人青森県情報サービス産業協会が主催のイベントで、地域のIT企業が中心となって毎年開催されている展示会であり、今回は、14ブースの出展があった。

青森大学ソフトウェア情報学部は、青森市のIT企業ソフトアカデミーあおもりと共同で、Ruby on Railsに関する展示を行った。また、今回のユビキタス・フェアでは、Ruby on Railsに関する出展が他にもたくさんあり、セミナーも開催された。Ruby on Railsは、国産のプログラミング言語Rubyによる、Webアプリケーション・フレームワーク(Webアプリケーションの骨組み)で、高速にアプリケーションを開発できる機能を持っている。青森大学では、以前からRuby on Railsに取り組んでおり、青森県内の有志によるRuby勉強会@あおもりの会場なども提供してきた。

今回、青森大学ソフトウェア情報学部からは、まち歩きなどの散策型観光を支援するスマートフォン向けWebアプリケーションMapRambleを出展した。MapRambleは、サーバー上で動くプログラムはRuby on Railsを用いて開発され、クラウドサービスHerokuで稼働している。また、新しいWebの規格HTML5などを採用して、スマートフォンの位置情報などの機能を積極的に利用したアプリケーションとなっている。MapRambleでは、行きたい観光スポットを地図やリストから選択して、自分だけの「マイマップ」を作れ、最適なルートを調べることができる。また、実際に現地では、スタンプラリーでスタンプを押すように、記念にチェックインすることもできる。MapRambleは、今年開催された「ながれやまオープンガーデン2013」(千葉県流山市)、「第4回モノマチ」(東京都台東区)などのイベントにも利用された。

[実践交流マッチング「税金はどこへ行った？」] (小久保 温、坂井 雄介、角田 均、李 孝烈、和島 茂)

青森大学ソフトウェア情報学部が、富士通システムズ・イーストと連携して提案した内容が、青森県実践交流マッチング事業に採択され、11月14日からはじまった。ソフトウェア情報学部の1～3年生十数名が参加している。

青森県商工労働部新産業創造課は、若者が地域でIT(情報技術)を学び、地域で活躍することを支援する事業を続けてきており、今年度、新時代ITビジネス研究会を設立した。 新時代ITビジネス研究会にはデータセンター、クラウド、オープンデータ、IT人財定着などに関する部会があり、IT人財定着部会において、学生とIT企業が交流を深めるために実践交流マッチング事業を実施することになった。

実施する事業は、オープンデータ活用の代表的な取組みの一つである「税金はどこへ行った？」を題材に、ソフトウェア情報学部の学生が主体となって、IT企業や行政や市民と交流しながら、ITと地域や仕事について能動的に学ぶものである。

「税金はどこへ行った？」は、自治体が公開している予算データなどをもとに、自分の年収から地方税を算出し、1日あたりどのような用途にいくら使われているかを視覚化するWebアプリケーションである。2012年に横浜市ではじまり、オープンデータに関する「ハッカソン」(プログラムを開発するイベント)などで開催地の「税金はどこへ行った？」を制作する取組みが進み、現時点で全国50都市を超える「税金はどこへ行った？」が作られている。しかし、青森県内ではまだ作られている市町村はない。

今回の実践交流マッチング事業は、青森県や県内市町村の「税金はどこへ行った？」を、青森大学の学生が市民の参加のもとに制作することを目標とし、その一連の取組みを通じて、学生が学んだ技術や感性を生かし、IT企業や自治体や市民と交流し、情報技術や実際に仕事をするために必要なスキルの習得を目指している。

具体的には、以下のスケジュールで進められている。第1回、第2回は、青森大学社会学部の櫛引素夫先生、柏谷至先生の協力を得た。また、富士通システムズ・イースト、NPO「地域情報化モデル研究会」、青森県庁などから、計10名近くの人たちに参加していただいた。

11月14日 第1回 ガイダンス

12月2日 第2回 ディスカッション

1月23日 あおもりオープンデータ活用推進フォーラムにて発表(予定)

2月22日 全世界イベントInternational Open Data Day 2014を開催(予定)

[情報アカデミックサポートセミナー] (石田 努、小久保 温、李 孝烈)

11月24日に青森県情報アカデミックサポートセミナーが開催され、たくさんの青森大学ソフトウェア情報学部の3年生が参加した。 セミナーでは、情報産業のトレンドと魅力や、女性・文系エンジニアの活躍、北海道の企業の事例、ICT(情報通信技術)教育推進協議会など、青森県ではなかなか聞くことができない話を聞くことができた。

今回のセミナーは、先の実践交流マッチングに関する記事で紹介した青森県新時代ITビジネス研究会IT人財定着部会が大学の教員と学生を支援するため開催した。今回のセミナーは、青森県と青森公立大学との共同企画となっており、前半が青森県主催のセミナー、後半がそれを受けてのパネルディスカッション(青森公立大学主催)という構成だった。

[岩手県立視聴覚障害者情報センターの三者交流会] (小久保 温、角田 均、和島 茂)

12月4日に、岩手県立視聴覚障害者情報センターの三者(利用者・奉仕員・職員)交流会が開催され、青森大学ソフトウェア情報学部で取り組んで来た「触れる絵画」の鑑賞会が実施された。

「触れる絵画」は、視覚障害者と一緒にアートを楽しむために、情報技術を活用して絵画を立体化したものである。「触れる絵画」は、青森県障害福祉課、青森県立美術館、津軽金山焼などと連携し、青森県立盲学校、青森県視力 障害者福祉連合会、青森県視覚障害者情報センターなどの協力を得ながら進めてきた。

今回、岩手県立視聴覚障害者情報センターの三者交流会で行われた鑑賞会では、作品にそれぞれ解説係の方がつき、センターの利用者20名程度の方が説明を受けながら鑑賞した。鑑賞した方たちからは、「大変貴重な体験ができ、感激した」「話には聞いていた作品を楽しめてうれしかった」といった感想が出たそうである。

[観光行政のイノベーション～台湾と青森市の観光振興のために] (小久保 温)

青森大学ソフトウェア情報学部では、地理・位置情報を活用し、スマートフォンなどのデバイスに対応したWebアプリケーションの開発に取り組んできた。今回それらの技術を活用し、ソフトウェア情報学部の3年生の織田将史さんと今北斗さんが、自主的に青森公立大学地域みらい学科の遠藤哲哉先生のゼミの学生とコラボレーションして取り組んでいる、青森市中心商店街の活性化に関する研究について、12月14日に青森駅前のイベント施設BLACK BOXで開催されたイベントで発表した。

イベントの正式名称は、青森公立大学平成25年度戦略的研究助成事業、地域研究センタープロジェクト事業「地域ガバナンスの創造」による、日台における合同研究会・交歓会「観光行政のイノベーション～台湾と青森市の観光振興のために」で、青森公立大学地域みらい学科の遠藤哲哉先生が主催した。

このイベントでは、最初に青森市役所経済部長佐々木淳一氏が青森の観光について紹介し、台湾の中国文化大学行政管理学系の邵建民(ジョニー・ショ―)助理教授と余小云(ソフィア・ユー)副教授兼系主任を台湾の観光を語った。そして、青森公立大学と青森大学の学生がソーシャルビジネスとモバイルWebアプリを活用した商店街活性化の取組みについて発表した。

その後、同じ会場で交歓会が開催され、青森市中心商店街の方々が焼いてくださったアップルパイや、青森公立大学の学生たちが用意した料理を食べながら、楽しく歓談した。

なお、このイベントには、青森大学経営学部の中村和彦先生とそのゼミの学生も参加し、さまざまな交流を深める機会となった。

[青森工業高校インターンシップ] (小久保 温、角田 均、和島 茂)

平成25年7月9～11の3日間にわたり、青森工業高校の2年生19名を対象に組込みシステムとCGをテーマとしたインターンシップを実施した。

組込みシステムの講義では二輪走行のロボットのためのライントレース、衝突回避プログラムの作成を行い、CG制作の講義ではモデリングソフトSketchUpによる建物の制作を行い、いずれも参加者には好評であった。

[青森山田高校セミナー] (角田 均、和島 茂)

平成25年9月11, 12日の2日間にわたり、青森山田高校の情報処理科1年生22名, 2年生25名を対象としてプログラミングセミナーを実施した。ソフトウェア情報学部の3, 4年生が講師となり、シミュレーションやAR(拡張現実)をテーマとして講義・実習を行った。

いずれも学生がセミナーのために制作したプログラムを教材として使用した。シミュレーションの講義では分子の運動や生物の繁殖などをPC上で再現し、ARの講義ではWebカメラの前で動くものに様々な効果を与えるもの、バーチャルなペットを飼育するもの、モデルガンの操作に応じて火花を散らすものなどを紹介した。

[講演]

角田均、小久保温、まちなかキャンパス青森大学公開講座"ジオ・コンピューティング ～地理情報による観光支援と街づくり"、2013年10月17日、アスパム

[活動報告]

【友野玲子＆白岩貢＆小木曽美津子リートリサイタル】 ～歌で紡ぐ男と女の恋物語～2013年7月5日（東京・杉並公会堂）2013年7月14日（アウガ5階AV多機能ホール）（白岩 貢）

【県病ふれあいコンサート2013】 2013年7月22日（青森県立中央病院）（白岩 貢）

【首都オペラ公演“ハムレット”墓堀人Ⅰ役】2013年8月31日・9月1日（神奈川県民ホール）（白岩 貢）

【2013夢見る初秋～名曲コンサート】2013年9月12日（神奈川県藤沢市・湘南台文化センター）（白岩貢）

【徐福来町2222周年記念津軽半島音楽祭】～白岩貢声楽リサイタル～ 2013年9月22日（中泊町・徐福の里公園）（白岩 貢）

【オープンカレッジ市民大学第14講】 ～叙情歌を愉しむ～ 2013年9月27日（青森大学オープンカレッジ）（白岩 貢）

【歌い継ごう童謡・唱歌in青森2013】パフォーマンスサークル 学生2名と出演 2013年9月29日（ワ・ラッセ・西の広場）（白岩 貢）

【オペラをみんなのものに～シネマとコンサートinあおもり】開催実行委員 2013年10月12日（新町キューブ）（白岩 貢）

【青森大学大学祭】～白岩貢「声楽リサイタル」～ 203年10月13日（記念ホール）（白岩 貢）

【第2回小春忌ミュージックパーティー】2013年11月3日（埼玉県吉川市・おあしす多目的ホール）（白岩 貢）

[学会、研究会発表]

三浦元太郎、小久保温、和島茂、 "触れる絵画 ： 小林麗「ペリグーの街角」の立体化"、平成25年度第1回芸術科学会東北支部研究会、2013年7月14日、青森市民ホール

嶋田凌、三上絢佳、角田均、 "「あおもり街てく」～建物モデリングによる街並みの再現"、平成25年度第1回芸術科学会東北支部研究会、2013年7月14日、青森市民ホール

小久保温、土屋薫(江戸川大学)、"散策型観光支援モバイルWebアプリの開発と実証実験 ～ながれやまオープンガーデン2013、第4回モノマチの事例～"、平成25年度第1回芸術科学会東北支部研究会、2013年7月14日、青森市民ホール

和島茂、角田均、"斜め写真の活用"、平成25年度第2回芸術科学会東北支部研究会、2013年9月28日、秋田県民会館ジョイナス

小久保温、土屋薫、工藤雅世、"散策型観光支援モバイルWebアプリケーションの開発"、青森大学研究紀要 第36巻第2号 pp.53-60、2013年11月1日

薬　学　部

[中高生の薬剤師体験セミナーの開催]

本学薬学部において8月31日(土)青森県内の中高生を対象とした「薬剤師体験セミナー」が開催された。このセミナーは青森大学と青森県教育委員会が今年4月に県内の教育の振興を目的として結んだ連携協定に基づいて行ったものである。第1回目となるセミナーには中学生と高校生それぞれ30名、県教委側担当者などが参加した。具体的なメニューは、以下の通りである。中学生：調剤体験、現役薬剤師との座談会、化学実験デモンストレーション； 高校生：調剤体験、現役薬剤師との座談会、薬の合成体験①②。現役薬剤師として本学の卒業生3名が参加し「薬剤師の仕事ってどんなもの？」という題名で座談会を行った。一方、調剤体験、化学実験デモ、薬の合成体験では、薬学部から教員5名と学生スタッフ12名が参加し、生徒への指導・説明にあたった。セミナーの様子は東奥日報などで報じられ、薬学部としては、このセミナーが薬学に興味をもち、薬剤師をめざす生徒が一人でも増えることに役立てることができればありがたいと考えている。

最後になりましたが、このセミナーの運営等に協力頂いたすべての関係者にこの場を借りてお礼申し上げます。（薬学部長 熊﨑　隆）

［青森大学薬学部同窓会第1回総会・生涯教育講演会の開催］

青森大学薬学部同窓会の第1回総会が11月23日(土)13時より卒業生と現・元教職員約50名が参加してラ・プラス青森で開催された。総会では、まず学部長挨拶の後、議長に上田條二薬学部教授を選出、その後会則の承認を経て、初代同窓会長に4年制度一期生の塩崎佳友氏を選出した。その後、生涯教育講演会に進み、佐藤栄作薬学部教授による「最新医薬のトピックス」の講演があった。懇親会では、最初に崎谷康文青森大学学長、続いて旧職員の藤井正美薬学部元教授がそれぞれ挨拶された。さらに塩崎初代同窓会長から所信表明の挨拶があった。青森大学薬学部は平成16年4月に4年制度で開設され、これまでに4年制度と6年制度合わせて365名の卒業生を世に送り出し、その殆どが薬剤師として主に青森県を含む東北・北海道地域で活躍している。今回、最初の卒業生を平成20年3月に送り出してから、立ち上げに少し時間を要したが、薬学部としての同窓会設立にこぎつけたことは色々な意味で大変喜ばしいことである。今後、大学の重要な使命である地域貢献（薬学部の場合は、地域医療への貢献）において同窓会の果たす役割は大きいと考える。そのためにも立ち上げたばかりの同窓会を皆で盛り上げる努力が必要であろう。

最後になりましたが、同窓会の立ち上げに関わった卒業生・現・元教職員の皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。（薬学部長 熊﨑　隆）

[報告論文]

H Yamaguchi, Y Kidachi, K Kamiie, T Noshita, H Umetsu, Y Fuke, K Ryoyama. Utilization of 6-

(methylsulfinyl)hexyl isothiocyanate for sensitization of tumor cells to antitumor agents in combination therapies. Biochem Pharmacol, 86, 458–468 (2013).

H Yamaguchi, K Kamiie, Y Kidachi, T Noshita, H Umetsu, Y Fuke, K Ryoyama. Prediction of the possible inhibitory effect of 6- (methylsulfinyl)hexyl isothiocyanate (6MITC) and its analogs on P-glycoprotein (P-gp) by in silico analysis of their interaction energies. Int J Comput Bioinfo In Silico Model. 2(4), 206-212 (2013).

[学会発表など]

上家勝芳, 木立由美, 幕内志野, 山口秀明, 梅津博紀, 猟山一雄　「マウスがん細胞の遺伝子発現に対するグリチルレチン酸の影響」第 36 回日本分子生物学会年会, 2013 年 12 月 4 日, 神戸国際展示場

[研究ノート]

天内博康　「Moodle を活用した情報科目教育の実践」青森大学・青森短期大学『研究紀要』第 36 巻第 2 号（通巻 117 号）p.115～124　2013 年 11 月

[県立青森中央高等学校との高大連携]　（天内博康）

県立青森中央高等学校が実施している“総合的な学習の時間”の「あすなろ学」について、研究発表に向けた「情報のまとめ方・伝え方～パワーポイントの活用について～」を、昨年度に引き続いて高大連携で指導しました。社会学部佐々木てる准教授とソフトウェア情報学部石田努准教授と共に３人で担当しました。２年目となる今年は、青森大学において３回、青森中央高等学校において４回の指導をしました。１２月１２日には、全校生徒の前で「あすなろ学」実践研究発表会が行われ、高校生らしい素晴らしいものとなりました。

参考：http://www.tosei-w.asn.ed.jp/~chuo/h21asunaro/asunaro1.html

編　集　後　記

本ニュースは第 24 号までは『青森大学・短期大学ニュース』でしたが、平成 25 年（2013 年）3 月末をもって青森短期大学が閉校したため、今後は『青森大学ニュース』と改称し、今号は第 25 号といたしました。今後とも『青森大学ニュース』をよろしくお願いいたします。